人吉市まちなかグランドデザイン推進アクションプラン（案）

令和7年3月
人吉市

アクションプランに込めた想い

人吉市長
松岡 隼人

令和2年7月豪雨災害からの復興に当たって、被災前よりも住み良いまちを創ろうという基本理念のもと、災害から学んだ教訓と、未来への希望を胸に、本市の未来型復興を実現するべく、まちづくりの将来像やビジョンを具体的に示したアクションプランをここに取りまとめたところでございます。

アクションプランは、市民、民間事業者、専門家の皆様、そして行政が一体となり創り上げたワクワクするようなアイデア集であり、持続可能なまちづくりを進めていきたいという皆様の強い想いが込められています。

「住み続けたい」「行ってみたい」「共に楽しみたい」まちの実現に向けて、このアクションプランに基づく、具体的な取組を力強く押し進める覚悟です。

また、このアクションプランは、決して完成されたものではありません。これから皆様と共に議論を積み重ね、新たなアイデアを盛り込みながら、より良いものへと進化させていきましょう。

時の流れと共に常に変化を遂げるこのアクションプランを、より良い人吉の未来を創造するための道標として、公民連携のもと、活力と魅力を高め、良質な暮らしを実現できる未来の人吉を目指し、取組を更に進めてまいります。

人吉復興まちづくりデザイン会議　座長
星野 裕司

令和2年7月から、4年8ヶ月が過ぎようとしています。まずは，被害にあわれた方々や、いまだご不便な暮らしを続けられている方々へ、心よりお見舞いを申し上げます。

一方、少しずつかもしれませんが、復旧や復興が進みはじめています。ここに公開する「人吉市まちなかグランドデザイン推進アクションプラン」も、そのひとつとして、人吉市復興まちづくりデザイン会議や市民の皆様と議論し、まとめたものです。

ポイントは、「つかう」と「つくる」です。今までの公共事業の多くは、「つくる」を先に、後から「つかう」を考えるというものでした。でも例えば「家づくり」だと、「つかう」を具体的に想像しながら，ワクワクして「つくる」を考えるでしょう。このアクションプランが目指しているのは、そのような「まちづくり」です。

「つかう」のはもちろん市民の皆様です。球磨川を眺めながらお茶をする。自ら手入れしている公園で子ども達を集めて遊ぶ。居心地の良い広場に面してなりわいを営む。そして大変な時にはみんなで助け合う。使い方は様々ですが、それらすべてが市民一人一人をまちの主役にするとともに、その積み重ねが安心を育んでいくのではないでしょうか。また、そのような暮らしは、人吉の豊かさをさらに引き出し、来訪者にとっても大きな魅力となるでしょう。

このアクションプランが、これからの人吉をつくっていく確かな手がかりになることを願っています。

［目次］

はじめに～安心して住み続けられるまちづくり～

P7-

第１章 アクションプランの考え方

（１）私たちが描くまちづくりのサイクル

（２）更新を前提とするアクションプラン

P11-

第２章 アクションプランの位置付け・経緯

（１）アクションプランの位置づけ

（２）アクションプラン策定まで

（３）推進体制：地域の人・専門家・行政の意見から具体案へ

P16-

第３章 復興まちづくりの推進方策

（１）エリア全体の推進方策

①目標・方針・指標

②10拠点エリアを結ぶ水陸の回遊動線

③景観形成

④交通・駐車場・モビリティ

⑤夜間景観

⑥人吉まちなかランドバンク

⑦情報発信

⑧その他公共空間活用・維持管理・スキーム

⑨持続的な地域経営

（２）10拠点の活かし方と将来イメージ

（→これから個別のTFで具体的に進めていく）

①青井阿蘇神社＋球磨川　②中川原公園＋大橋

③胸川　④交流・文化の場（うぐいす温泉周辺）

⑤山田川・区画整理(紺屋町)　⑥鍛冶屋町通り

⑦人吉駅前＋SL　⑧城見庭園＋HASSENBA

⑨人吉城跡周辺　⑩新町

P87-

第４章アクションプランの実現に向けて

（１）社会実験を通じた「つかう」主体と進めるまちづくり

（２）社会実験の活用・段階的な進め方

（３）目標スケジュール

令和7年3月 人吉市

［問合せ先］ 人吉市 復興政策部 復興支援課　代表 0966-22-2111

はじめに～安心して住み続けられるまちづくり～

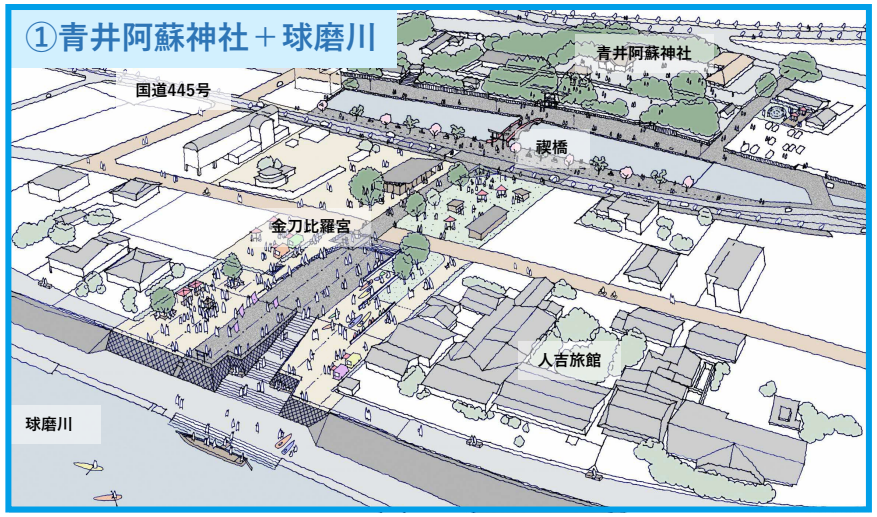
人吉市では、令和2年7月豪雨からの復旧・復興のため「人吉市復興まちづくり計画」に基づき、球磨川水系流域治水プロジェクトと連動して、安心して住み続けられるまちづくりを進めています。なかでも特に被害が大きかった「まちなか」エリアを対象に、官（行政）と民（民間）が連携してまちの将来の姿を具体化し、実現するために多くの方々と対話を重ねて取りまとめたのがこのアクションプランです。

地域の個を喪失せず人吉らしい姿でありながらも、より豊かな未来をつくるためには、災害から元の姿に戻すのみでなく、暮らしとなりわいの復興のその先を見越したハード整備や仕組みづくりが重要です。アクションプランの中には、球磨川の恵みや人吉のまちの資源のもとに、人々が憩い、楽しみ、豊かに過ごす将来のまちなかでのシーンが、エリアごとに描かれています。

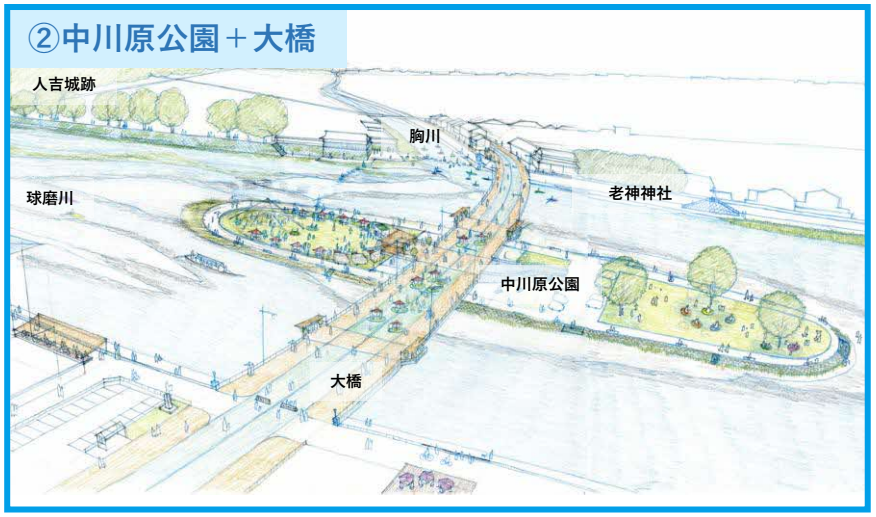
描かれた将来の姿は、行政だけで実現できるものではなく、これからのまちを担う民間のみなさんとさまざまな取り組みや実験を経て実現できるものです。このアクションプランは、まさに今始まったばかり。これからの取り組みによって内容も更新を重ねます。このアクションプランに、ぜひあなたのアイディアやありたい暮らしの姿を重ねてみてください。

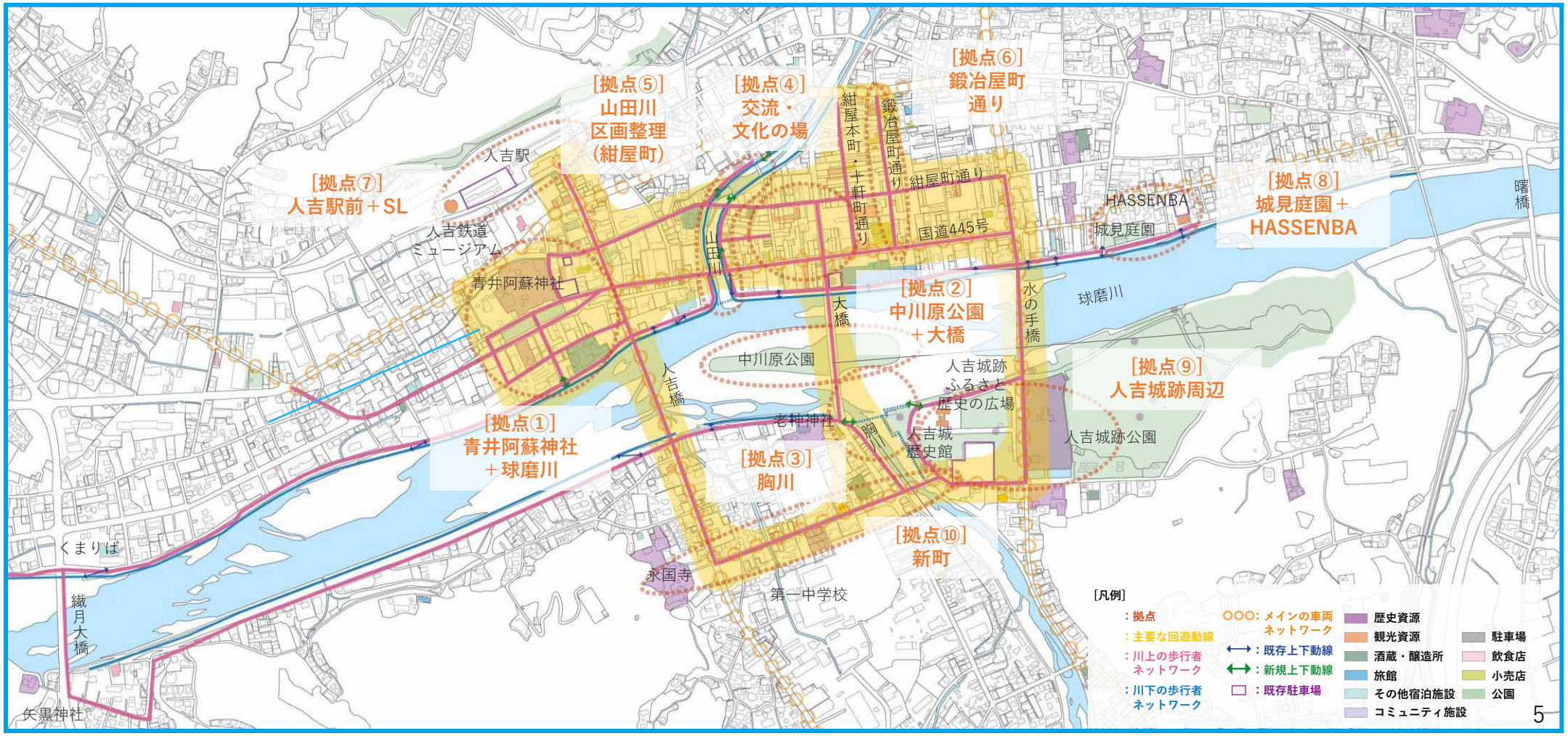
10の拠点エリアで実現を目指すシーン

①青井阿蘇神社＋球磨川

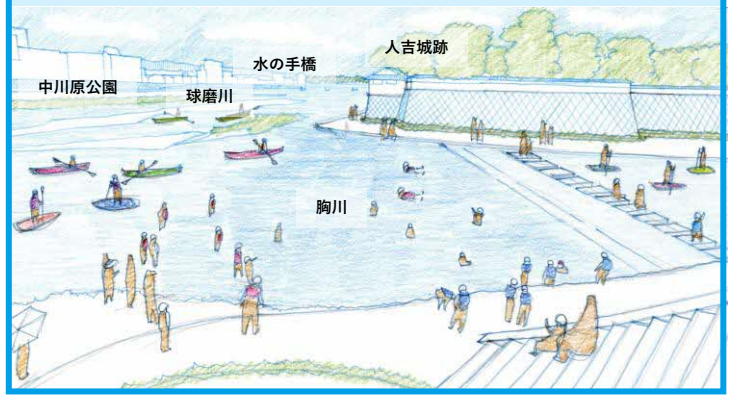


②中川原公園＋大橋



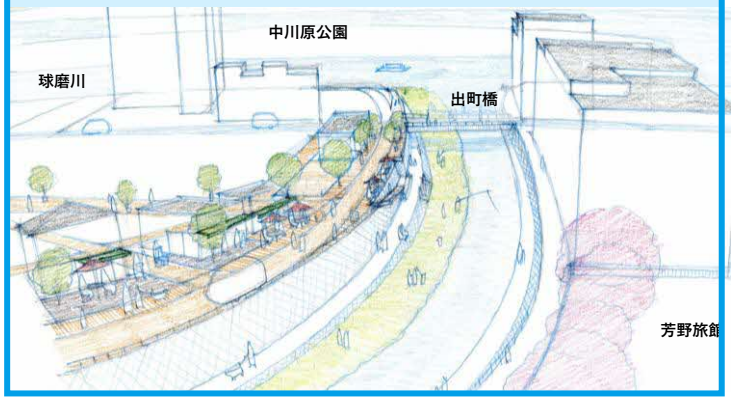


③胸川

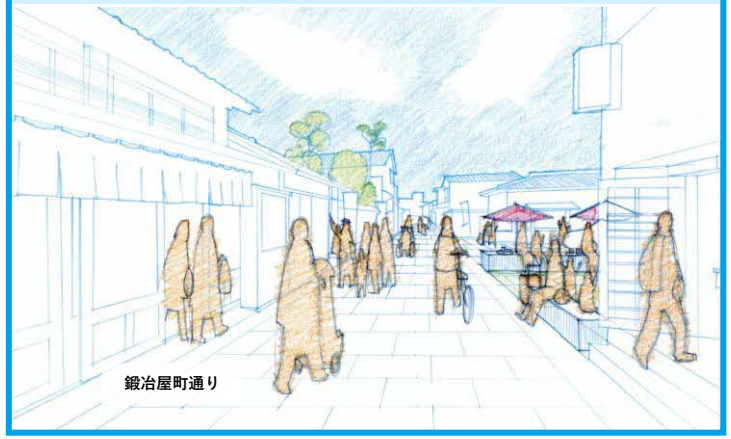


④交流・文化の場（うぐいす温泉周辺）

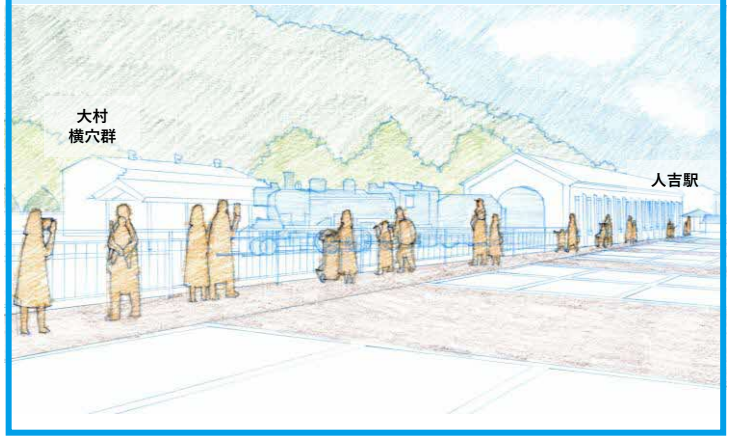
⑤山田川・区画整理(紺屋町)



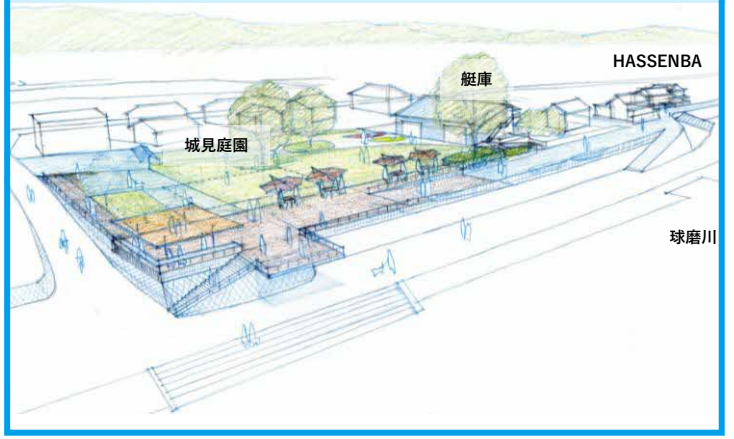
⑥鍛冶屋町通り



⑦人吉駅前＋SL

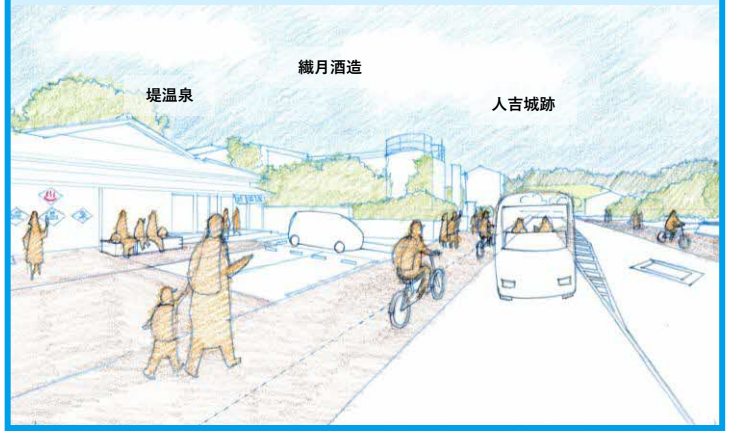


⑧城見庭園＋HASSENBA



⑨人吉城跡周辺

⑩新町

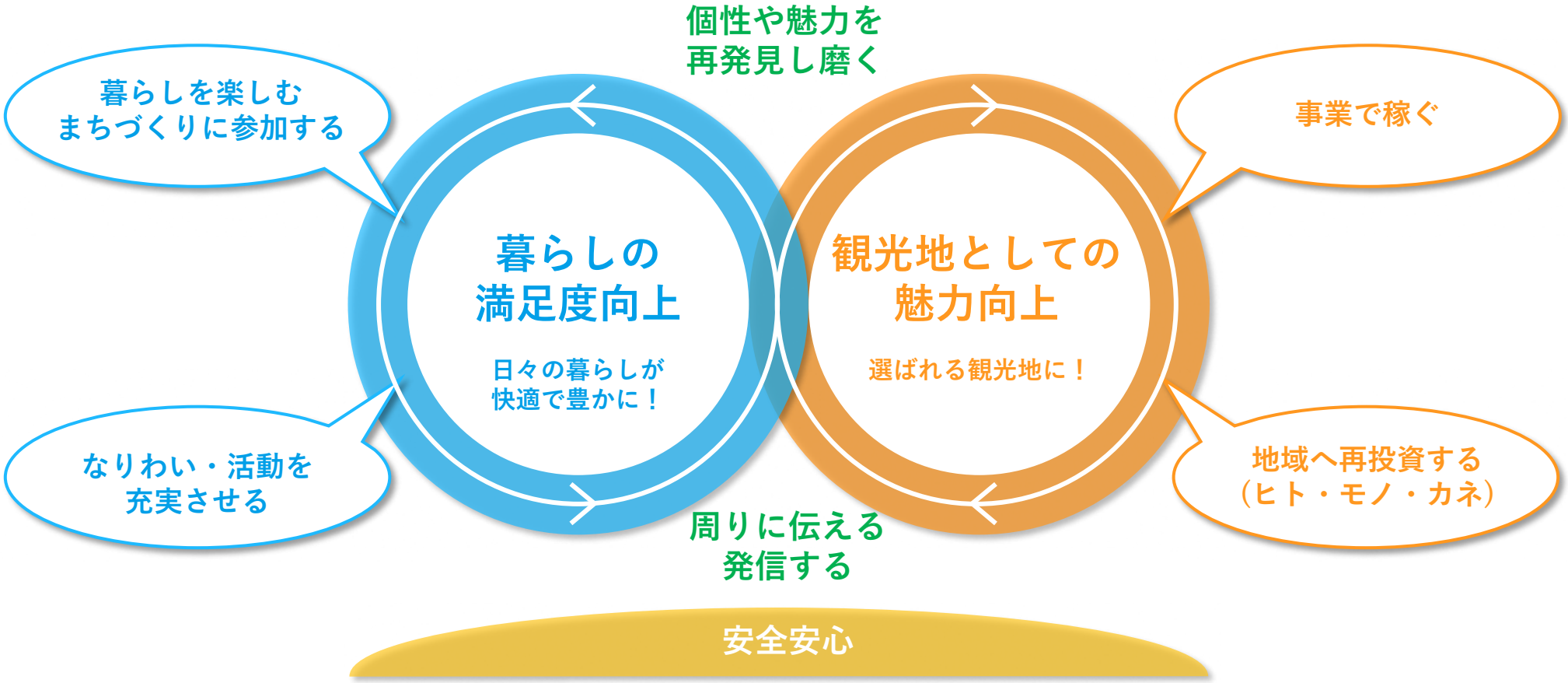


第１章
アクションプランの
考え方

アクションプランを通じた復興まちづくりで目指すのは、暮らす人が「住み続けたい」と思える、市外の人が「行ってみたい」と思える、そして誰もが「共に楽しみたい」と思えるまちになること。そのためには、暮らしの満足度向上と観光地としての魅力向上の両輪が好循環を生み出していくことが大切です。魅力あふれる人吉球磨の個性を大切にし、最大限に活かすことで暮らしとなりわいが充実し、地域への再投資が生まれる。そこから育つのが、次世代の子ども達や内外の人吉ファンが関わり続けたいと思える魅力あるまちの姿です。

住み続けたい・行ってみたい・共に楽しみたいまちへ

［目指す両輪サイクル］



清流球磨川の恵み、人吉球磨の個性・魅力

歴史のストーリー、原風景

隠れ里、独自の個性
山に囲まれ急流に遮られた場所
行き止まり文化

国宝
おくんち祭、球磨神楽
保守と進取

球磨川・胸川に向く川城
城と城下町をつなぐ中川原
職人町(鍛冶屋町大工町紺屋町)
市が立つまち

日本遺産に認定された
相良700年の歴史

人吉球磨に点在する社寺・仏像
既存社寺を壊さず遺した
身近にある重要文化財

全国でも人吉球磨
だけに残る
保存と普及の活動

様々な生業・産業との結びつき

郷土料理
ジビエ・鮎・うなぎ

灌漑により農地確保
米、たばこ、茶、栗
かつての基幹産業
多良木という地名

灌漑→豊富な米
→貴重な米の醸造を許可
世界有数の集積度、産地指定

1665年 球磨川開削→八代へ
1910年 球磨川下り開始
ラフティング等川に浮かぶ

約50の泉源
湖底層（人吉層）
マイ温泉文化

球磨エリアの中心
飲食店密度日本一

流域上下流の森やまちとのつながり

原生林
市房山
森林セラピー

流域
18年連続水質日本一

人吉盆地一体
相良家

多様な生態系
尺アユ
ゴイシツバメシジミ（市房山）
ヤマセミ・カワセミ

人吉球磨をつなぐ
車窓には球磨川
鉄道ファンの名所

原作：緑川ゆき氏の世界観
人吉球磨を一緒にとらえた
何でもない原風景

©緑川ゆき・白泉社／「夏目友人帳」製作委員会

（２）更新を前提とするアクションプラン

民間事業者・市民、専門家、行政のアイディアを重ね合わせる／更新前提のプラン

「**アクションプラン**」**は更新を前提とします。**なぜなら、**行政のみで実現できる計画ではなく、将来事業や運営を担う主体となる民間事業者・市民が大切**であり、また行政の財源によっても実現性は変わるため、アクションプランの内容は更新が前提で、実現が保証されたものではなく、また、**現時点で掲載されていない内容・エリア・テーマ等についても主体や事業・活動の内容が具体化してくれば追加していく**ものとします。

今回のアクションプランの範囲

更新を前提とする

※アクションプラン3章(2)が該当

これから個別のTFで具体的に進めていく
（行政・地域・民間事業者・専門家など）
（各拠点エリアの民間事業者や活動主体の目途、ハードのデザイン、公共空間運営やルールづくり）
必要に応じて社会実験で検証

※アクションプラン1章・2章・3章(1)が該当

令和7年3月に大きな考え方を共有
（回遊動線・拠点エリア、景観形成、夜間景観、交通、ランドバンク、情報発信、活用スキームなど）

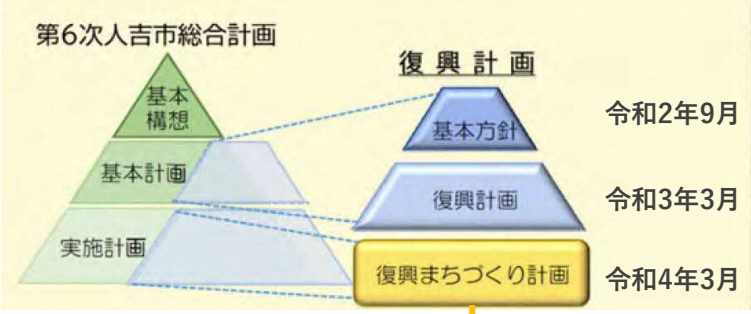
令和6年3月に人吉市が作成

第２章
アクションプランの
位置付け・経緯

「まちなかグランドデザイン推進方針」を具現化するための行動指針

これまでの復興まちづくりは主に行政によるハード整備・復旧事業中心の計画づくりが進められてきました。「まちなかグランドデザイン推進方針」(令和6年3月策定)で描かれる将来像の実現に向けては、**これまでの計画を基に、ハード整備後の運営主体・方法・財源等を想定しながら、民間投資と連動したハード整備と事業化を目指すフェーズに移行する必要**があります。本アクションプランは、**行政・民間・専門家のアイディアを重ね合わせた“ワクワクする将来の暮らしのアイディア集”であり、「まちなかグランドデザイン推進方針」を具現化するための行動指針**です。

［アクションプランの位置づけと役割］



まちなかグランドデザイン（重点3地区）

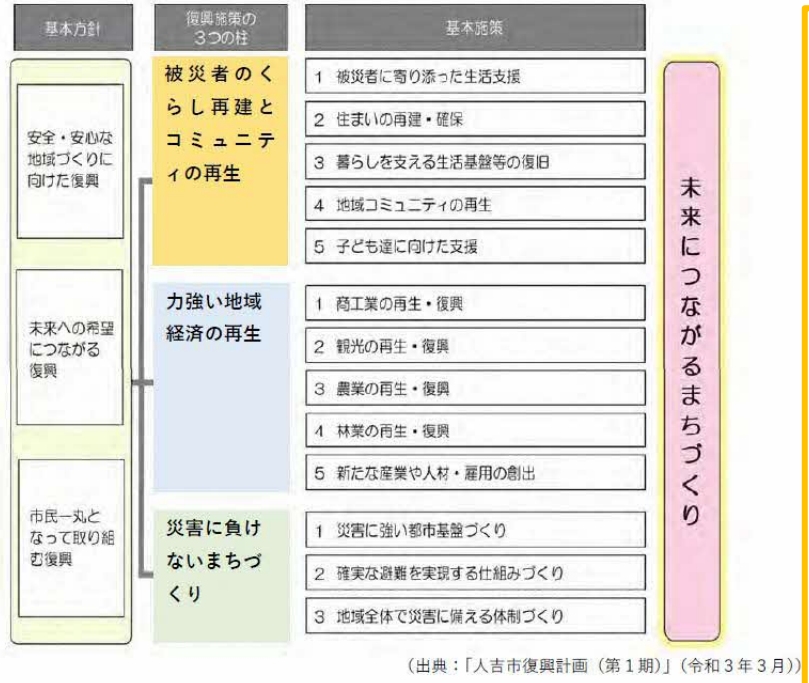
令和6年3月

まちなかグランドデザイン推進方針

令和7年3月

まちなかグランドデザイン推進アクションプラン

【復興計画における施策体系】



（出典：「人吉市復興計画（第１期）」（令和３年３月））

方針の反映及び施策の具体化

【復興まちづくり計画】

復興まちづくりの基本方針
実現方策（取組主体、実現に向けたプログラム）等

特に被害が大きい地区（重点地区）の被害状況や特性に応じた復興まちづくりの取組の具体化

まちなかグランドデザイン（重点3地区）

特に被害の大きかった「まちなか」3地区にて、地区を横断したまちづくりのために策定

令和6年3月

まちなかグランドデザイン推進方針

グランドデザインで定められた方針を早期に具現化し、スピード感のある取組が推進できるよう、「まちなか」が目指す将来像とプロジェクトをわかりやすく更新・明示し、市民、関係者間で共有するもの

令和7年3月

まちなかグランドデザイン推進アクションプラン

グランドデザインで定められた方針に、市民・専門家の想いやアイディアを重ね、具現化していくための具体的なアクションプラン（行動指針）

（２）アクションプラン策定まで

まず最初に、まちなかグランドデザインに描かれている行政のビジョンに、まちの人・事業者、専門家のアイディアや想いを重ね合わせ、令和6年11月にアクションプラン素案をとりまとめました。その後、５エリア全体のまちの人との意見交換、今後自らやりたいことのある市民・事業者による担い手ワークショップを実施し、来年度社会実験で実施するアイディアをイメージしつつ、過程の議論を反映させて、令和7年3月にアクションプランをとりまとめました。

行政
- 行政各課重点施策
- ５エリア既存ビジョン
  ①青井エリア　②中心市街地エリア
  ③麓・老神エリア
  ④かわまちづくりエリア
  ⑤人吉駅エリア

まちの人・事業者
民間事業者・市民のアイディア
（個別ヒアリングの実施）
- 既存の活動、事業
- 復興まちづくりに関する意見
- 今後の将来像イメージやアイディア、大切にしたいこと

専門家
各専門家のアイディア
（デザイン会議にて議論）
- 公民連携の進め方
- 回遊動線／拠点
- 景観形成・夜間景観
- 交通／モビリティ／駐車場
- 情報発信

デザイン会議

↓ アイディア集約

アクションプラン素案とりまとめ（令和6年11月）

↓

合同意見交換会（令和6年12月）

アクションプラン素案を叩き台とし、人吉の豊かな未来を実現するためのアイディアを出し合う時間として、高校生を含むさまざまな世代・エリアのまちの人・市内外の事業者など約130人が集まり、意見交換を行いました。

まちづくり協議会（令和7年2月）

青井・中心市街地のまちづくり協議会とアクションプラン素案などについて議論を行いました。

出張窓口（令和7年2月）

2月3日～7日までまちなか出張窓口を設け、アクションプラン素案に関する対話を行いました。

担い手ワークショップ（令和7年1月・2月）

まちの人・市内外の事業者が集まり、第1回目（1月）は自ら実践したいアイディアを発表・共有。それらのアイディアを第2回目（2月）やその後の打合せで議論・ブラッシュアップしました。約90人の活動・事業者の皆様の提案が集まりました。

↓ 反映

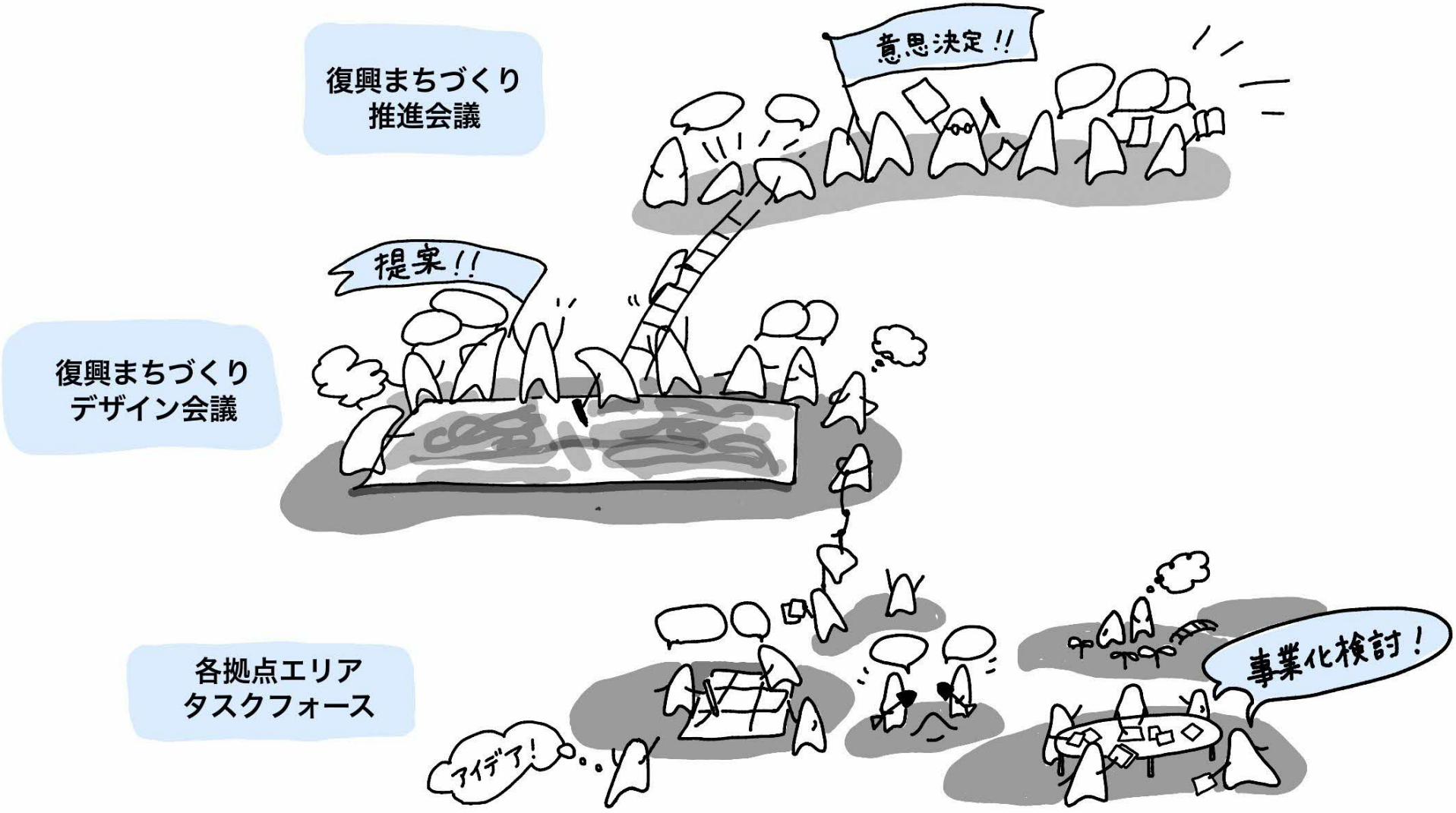
アクションプラン策定（令和7年3月・現在）
次年度社会実験内容・主体・検証項目の方向性

▶ まちなかフォーラムにて共有（令和7年3月）

（３）推進体制：地域の人・専門家・行政の意見から具体案へ

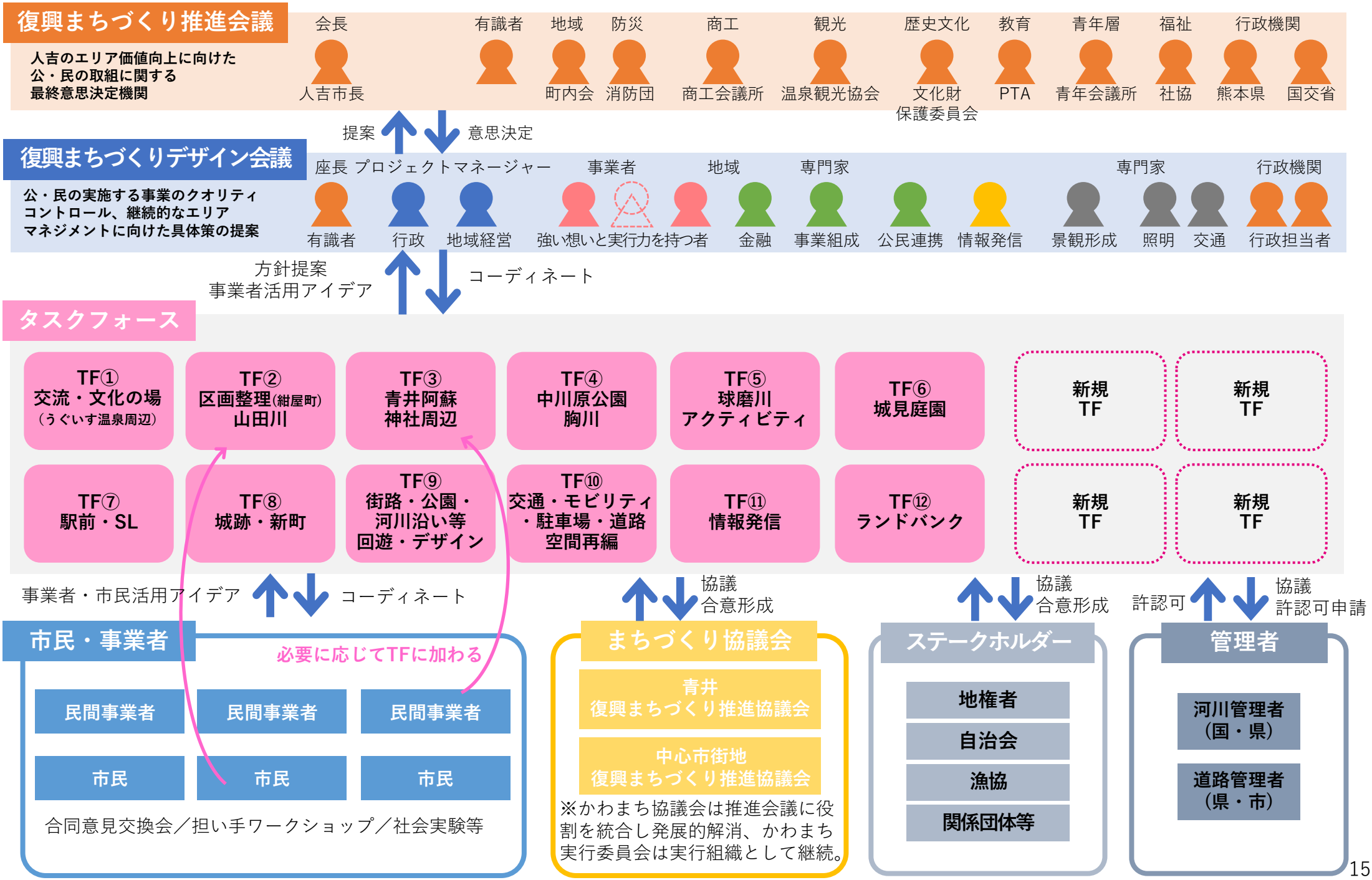
事業者・専門家・行政等によるデザイン会議が、各拠点エリアを中心に具体的な将来像や事業化検討等を行うタスクフォース（TF）と連携して具体策を検討し、意思決定組織である推進会議へ提案を行う体制で進めていきます。

タスクフォースは現状エリアやテーマに応じた12チームが各種検討を進めています。今後、その他のエリアやテーマのプロジェクトが生まれたら、新規タスクフォースを立ち上げることも想定しています。



（３）推進体制：地域の人・専門家・行政の意見から具体案へ

［推進体制図］　官民連携の推進体制の詳細は下図のとおりです。



第３章
復興まちづくりの
推進方策

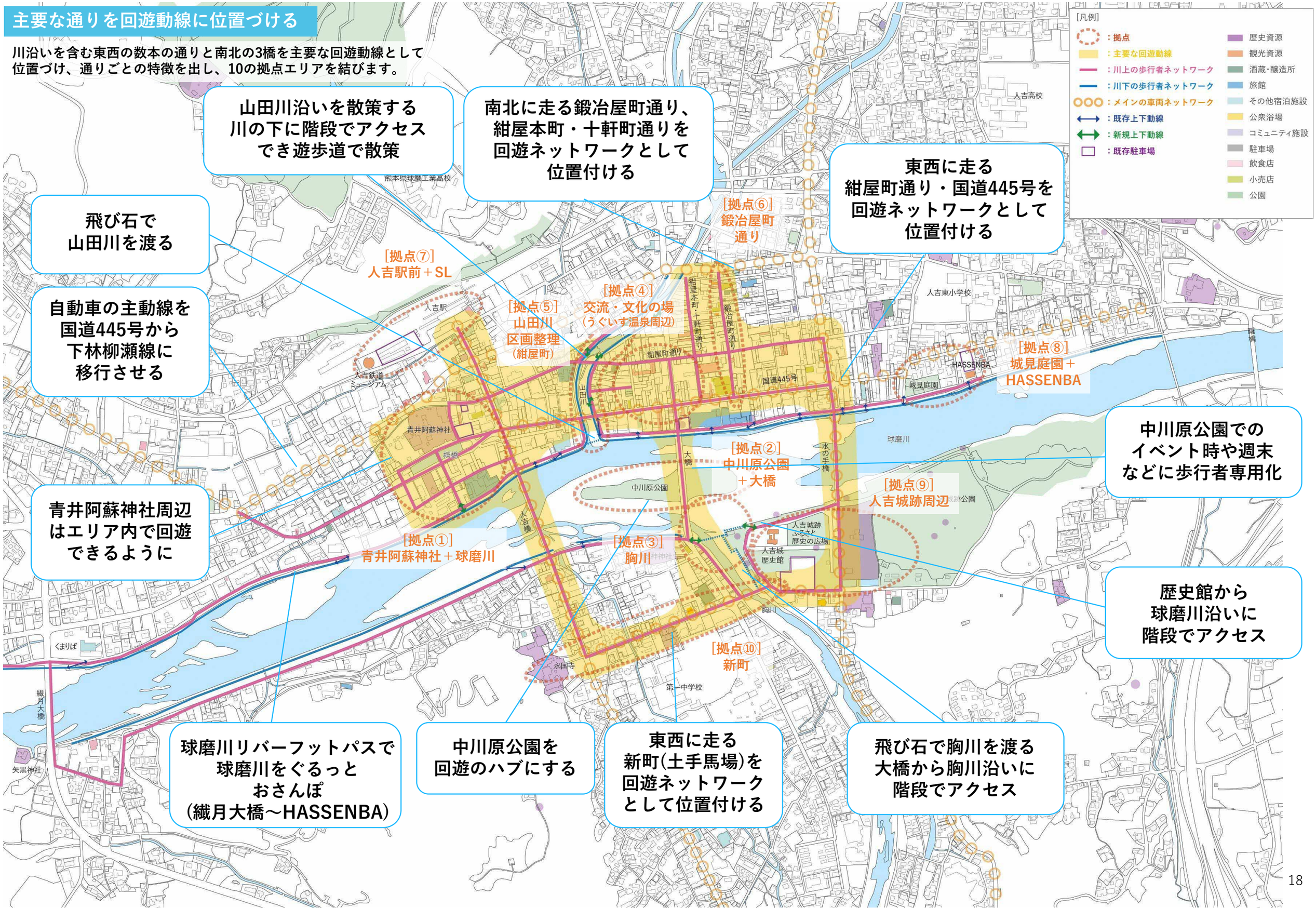
（1）エリア全体　①目標・方針・指標

暮らしの満足度向上と観光地としての魅力向上の両輪によるサイクルを生み出すための目標・方針・指標を下記のように設定します。指標の計測方法は今後検討します。

	［1］	［2］	［3］	［4］
目標	清流球磨川との関わり方が充実している	暮らしの満足度が向上している	観光地としての魅力が向上している	市民が復興まちづくりに共感し参加している
方針	①回遊性の高い河畔フットパス ②中川原公園を滞在・回遊のハブに ③絵になる川沿いの風景を維持し磨く ④アクティビティの充実（季節・時間帯・祭礼時など）	①主要回遊動線の高質化・街並み形成 ②主要拠点エリアの官民連携による事業化 ③空き地の質の向上、流動化の仕組み導入 ④幅広い年代・属性の市民のサードプレイス ⑤地域資源に触れる機会の創出	①地域ブランド再構築を意識した情報発信 ②巡りたくなるアクセスやモビリティ ③絵になる風景の創出 ④文化体験コンテンツの拡充と情報発信の連動 ⑤持続する観光地経営	①市民が復興まちづくりの情報を得られるきっかけと仕組みづくり ②既存市内メディアの連携、市民の発信参加の促進 ③10代の若者の参画機会の創出
指標	①川沿いの遊歩道・中川原公園の利用者数 ②アクティビティの属性・多様性	①既存事業・活動の充実を含む、新規ビジネスやサービスの数・質 ②市民の愛着醸成・関わり方の多様性カウント	①観光客数（日帰り・宿泊） ②RevPAR ③ブランドとターゲットに応じたメディアへの露出	①事業者や市民、観光客参加型の人吉らしい発信スタイルの盛り上がり ②復興まちづくり事業で生まれた施設・場所における市民発意の取組数

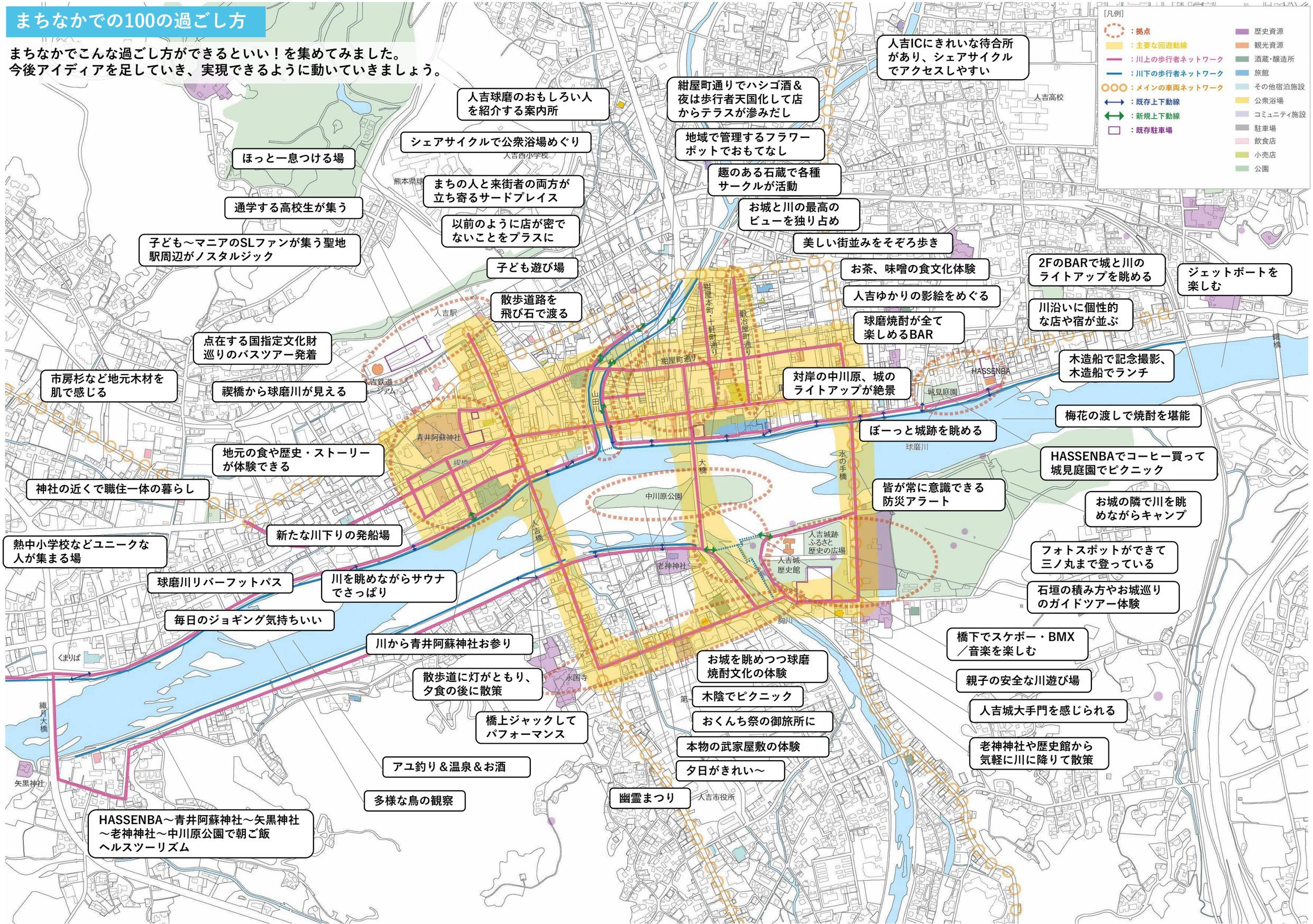
主要な通りを回遊動線に位置づける

川沿いを含む東西の数本の通りと南北の3橋を主要な回遊動線として位置づけ、通りごとの特徴を出し、10の拠点エリアを結びます。



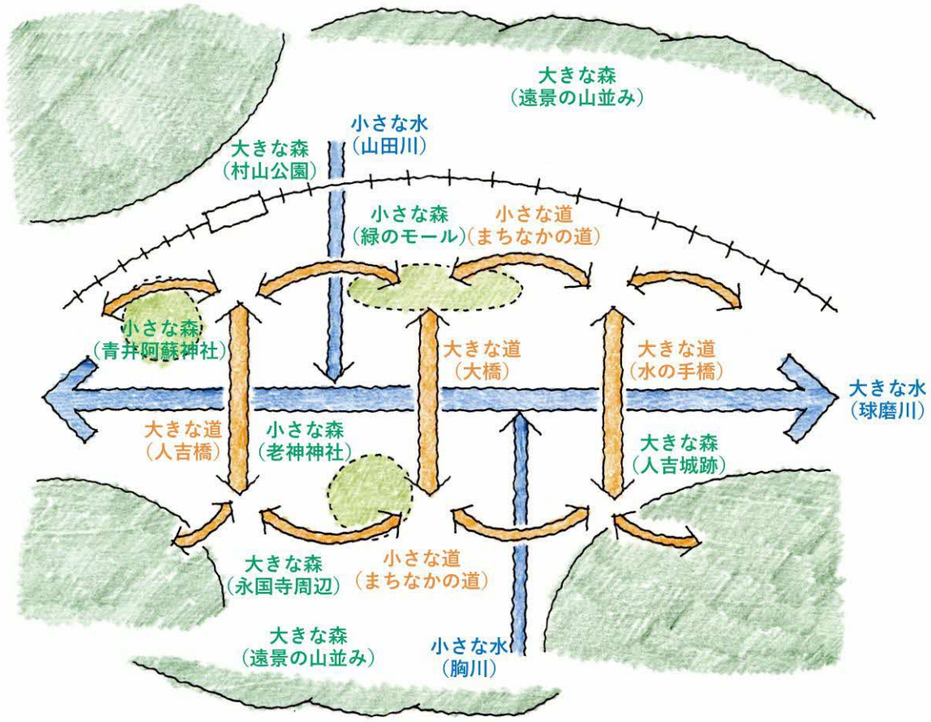
まちなかでの100の過ごし方

まちなかでこんな過ごし方ができるといい！を集めてみました。
今後アイディアを足していき、実現できるように動いていきましょう。

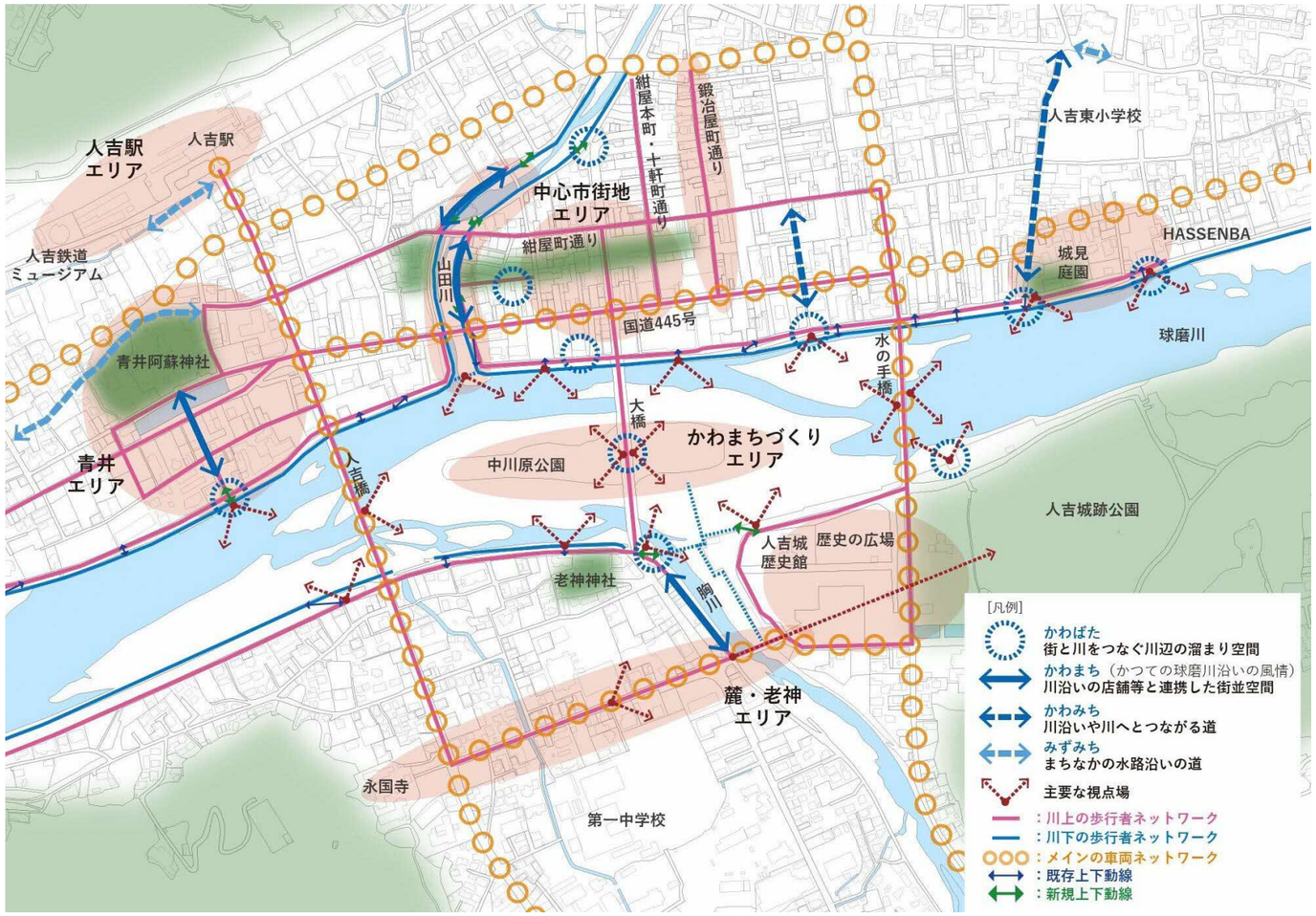


■人吉市街地の景観形成全体の考え方

球磨川を中心とした人吉市街地を構成する大事な要素である「水・森・道」を雄大な範囲のものから歩行範囲のものに分類し、それぞれの特徴を活かすことで、回遊の変化や楽しさを演出します。青井、中心市街地（山田川周辺）、麓・老神、かわまちづくり（中川原公園・城見庭園など）、人吉駅の5つのエリアを中心に、特徴的な水・森・道を活かした、公共と民間が連携する利活用や賑わいづくりを想定した景観形成を行っていきます。



■人吉市街地の景観形成の全体図



■景観形成に向けた各エリアの課題と方向性

■青井エリア

青井エリアは青井阿蘇神社の森という地域の主役があるだけでなく、前面の球磨川、神社周りの石畳や水路など活かすべき資源が多くあります。一方、既存道路によって神社と川沿いや人吉旅館までの動線が分断されており、回遊ルートの再整備が課題です。現在進められている土地区画整理事業に伴い、南北の「かわまち」と回遊動線を連携させることが望まれます。

■中心市街地エリア

中心市街地エリアでは空地を活用したコンテナマルシェや新規店舗の軒先活用がみられ、官民が連携した賑わい・回遊づくりが望まれます。山田川周辺では既存店舗や区画整理事業の区間で道路のシェアドスペース化など川沿いでの利活用を促す整備が望まれ、球磨川沿いでは「かわみち・かわばた」を作る建物もあり、川沿いの建築物のあり方として展開することも考えられます。

■麓・老神エリア

大橋からつながる胸川沿いの店舗・遊歩道を活かした「かわまち」としての魅力向上は重要です。老神エリアには織月酒造や堤温泉もあり、人吉の水や湯の文化を活かしたそぞろ歩きの仕掛けが望まれます。

■人吉駅エリア

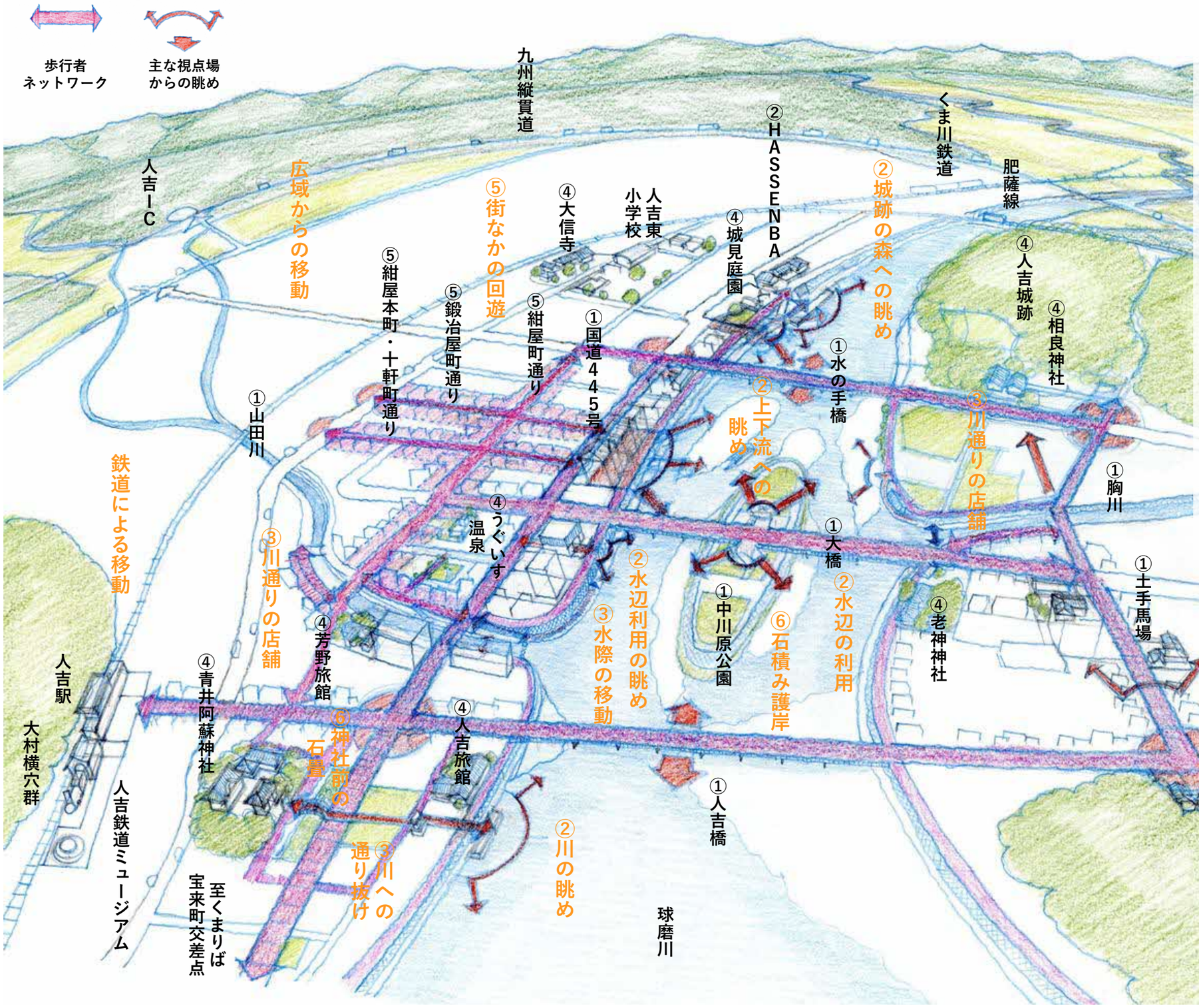
人吉駅エリアの水路は青井エリアともつながる「みずみち」として活かせる資源の一つです。また、人吉ICから人吉橋へとつながる車両動線上は、回遊の拠点となる駐車場整備の候補となる場所です。

■かわまちづくりエリア

中川原公園や城見庭園周辺のかわまちづくりエリアでは、観光や地域交流の拠点となる場所としての整備が望まれます。公園や河川が一体的に利活用できる整備や仕組み作りが求められます。

特徴的な「水・森・道」を活かした公共空間整備と民間利活用との連携によって、人吉らしい景観を形成

人吉球磨の観光の起点となる人吉市街地は、九州縦貫道の人吉IC・人吉球磨スマートICや肥薩線・くま川鉄道によって広域交通ネットワークを形成し、球磨川を中心とした**水文化の拠点**となっています。市内中心部は３つの橋が両岸を結び、　２つの支川（山田川・胸川）と中州（中川原公園）が作る地形によって、**特徴的な景観や水辺の使い方が生まれています。**これらを**眺め、巡る視点によって、人吉らしい風景を活かした景観形成**を目指します。



■景観形成の６つの視点

①市街地の主要動線と各エリアの視点
回遊を促す表通りと特徴的なエリアや支川をつなぐ

②川沿いの視点
橋梁間の特徴を活かした川沿いや水辺の利用を促す

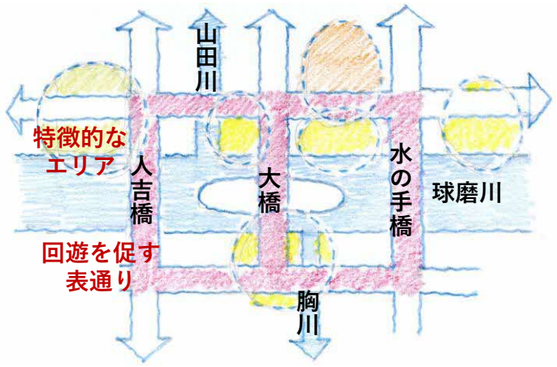
③川通りの視点
川に開かれた街並み形成や川へのアクセス強化、川通りでのにぎわい創出

④街なかの森・未利用地の視点
既存の森と新たに整備する緑を連続させ、未利用地の暫定的活用を促す

⑤通りの個性の視点
目抜き通りや飲食街としての通り、歴史のある通りなどの個性を活かす

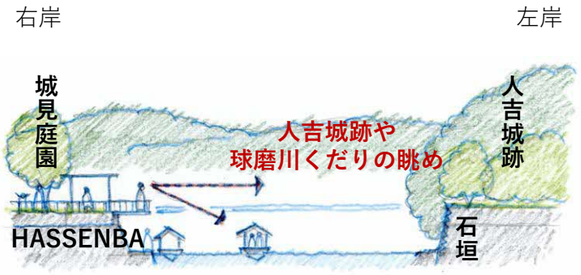
⑥素材の視点
人吉城跡を尊重した石積み護岸や神社の趣を感じる石畳を使っていく

1　市街地の主要動線と各エリアの視点

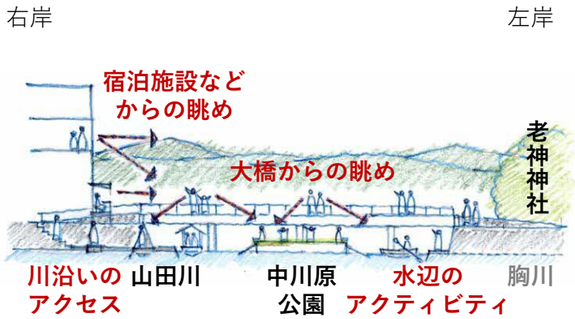


球磨川を中心とした水の手橋から人吉橋までを取り囲む**回遊を促す表通り**と**特徴的なエリアや支川**がつながることで、街なか回遊を促します。

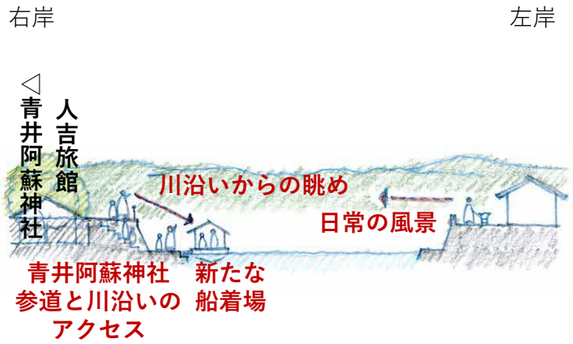
2　川沿いの視点



水の手橋より上流の区間
左岸の人吉城跡の石垣や城跡の森を望み、人吉の歴史や球磨川の静けさを感じる区間です。右岸の城見庭園やHASSENBAを主要な視点場とし、**落ち着いた雰囲気のエリア**を目指します。

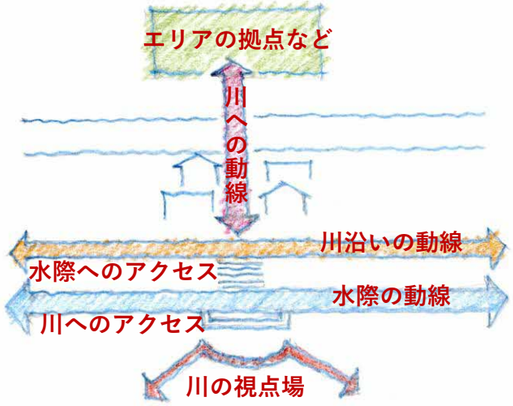


水の手橋から人吉橋の区間
右岸の宿泊施設や店舗から中川原公園や水辺のアクティビティを望み、活動的な球磨川を感じる区間です。山田川や胸川も含めた**川沿いの豊かな利活用を促すエリア**を目指します。

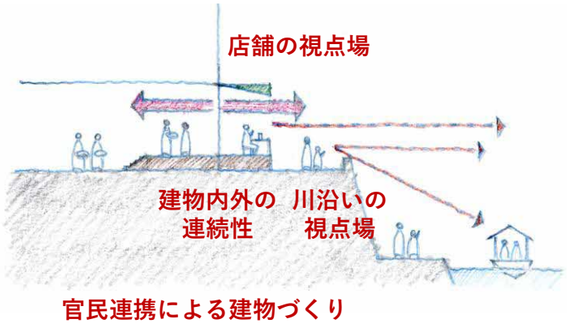


人吉橋より下流の区間
右岸の青井阿蘇神社の森が日常の風景の中で眺められる区間です。川沿いには新たな船着場を設けるなど、**青井阿蘇神社と球磨川との結びつきが感じられるエリア**を目指します。

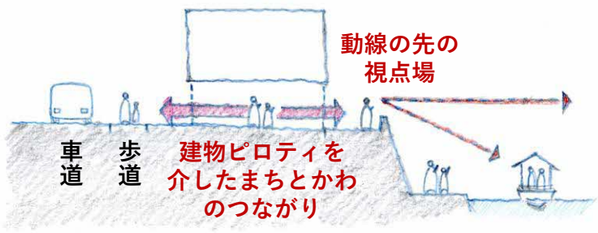
3　川通りの視点（かわみち・かわばた・かわまち）

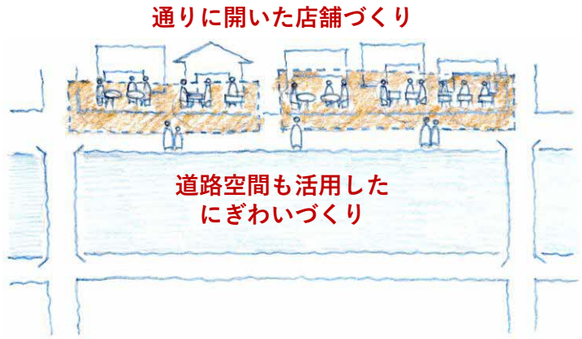


街と川との動線強化とアクセスや視点場
各エリアの拠点などから川への動線を強化し、川へのアクセスや視点場を設けることで、**人吉らしい街と川とのつながりや関り**を創出します。



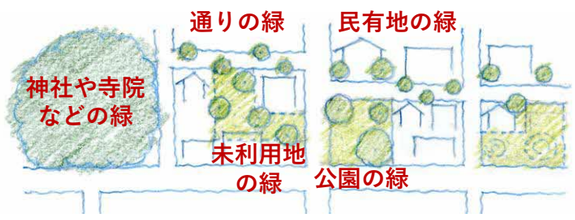
川に開かれた街並みの創出
川沿いの民有地とも連携し、**球磨川の風景を活かした宿泊施設や店舗づくり**を促します。水害対策としてのピロティ構造は川への視線の抜けや動線としても有効な作り方です。





川通りでのにぎわいの創出
川通りでの店舗などの営みは人吉らしい暮らしのひとつです。飲食などもしやすい道路空間づくりを行い、官民連携で**川沿いでのにぎわいの創出**を目指します。

4　街なかの森・未利用地の視点



街なかの森の連続
神社や寺院などの既存の森や樹木を緑の拠点とし、新たに整備する公園や通りへの緑の配置や未利用地を含む民有地への植栽を促すことで**街なかの森を連続**させていきます。

未利用地の景観づくり
行政や民間の未利用地をランドバンクの仕組みを作ることで**暫定的活用**につなげます。

5　通りの個性の視点

国道445号：青井阿蘇神社から宿泊街、HASSENBAを結ぶ目抜き通りとして、各々の街並みを尊重し、舗装や照明等の一貫した基盤整備を沿道とも連携します。
紺屋町通り：飲食街の通りとして、歩行者を優先し、夜間の歩きやすさも確保します。
鍛冶屋町通り：歴史のある通りとして、趣のある建物の作りを保全・展開し、バンコや小広場を活かします。
紺屋本町・十軒町通り：新旧の飲食店舗が並ぶ通りとして、観光客も訪れやすい基盤整備を沿道とも連携します。
土手馬場(新町)：人吉城跡と永国寺を結ぶ歴史のある通りとして、武家屋敷や酒造等の沿道とも連携します。

6　素材の視点

川城である人吉城跡の石垣を尊重し、球磨川や山田川、中川原公園の河川整備では**石積み護岸**を用いることで人吉や球磨川の歴史や景観、環境に配慮した素材とします。
青井阿蘇神社周辺では、神社の趣を感じられる**石畳**を公共用地でも使っていきます。

【主な現状・課題】

公共交通
- ◇JR、くま川鉄道ともに運休（バスによる代替輸送）
- ◇まちなかから離れた人吉ICでの高速バス接続
- ◇じゅぐりっと号により人吉駅～人吉IC間を接続しているが高速バスをカバーしきれていない
- ◇クルマ移動が中心で公共交通の利用者が減少
- ◇バス、タクシーともに運転手が不足

駐車場
- ◇来街者用の駐車場がほとんどない（現状の駐車状況の確認が必要）
- ◇駐車場がどこにあるかわかりにくい

シェアサイクル
- ◇６箇所の宿泊施設にポートを配置
- ◇民間事業としては採算性が厳しく規模縮小（50台10箇所→20台６箇所、30台在庫あり）

道路・交通規制
- ◇全体的にクルマ中心の道路構造
- ◇自転車通行空間が整備されていない
- ◇歩行者・自転車での回遊動線がわかりにくい

【交通・駐車場・モビリティの考え方】

公共交通を強化・補完し、まちなか各所のアクティビティとモビリティの統合的サービスを図る
～市民生活の利便性と来街者の回遊性を高める「MaaS※」の展開～

①**各交通モード間の乗り換えをスムーズに行うことができる「モビリティ・ハブ」を要所に整備**し、自分のペースでゆっくりとまちなかを回遊・体感できる交通インフラを形成します。

②自動運転やAI等の新技術を積極的に取り入れ、**時代に応じた交通システムへとアップデート**します。

③**来街者用の駐車場については、将来の需要を想定し、新規確保を検討**します。

④**シェアサイクル**については、既存のリソースの有効活用を前提としながら、**公民連携による持続可能な運営方式を検討**します。

⑤まちなかの回遊動線を充実するため、**道路舗装の美装化や歩行空間・自転車通行空間の整備、シェアドスペース等の採用によるクルマの速度低減**等を図ります。

※MaaS：Mobility as a Serviceの略。地域住民や旅行者一人一人のトリップ単位での移動ニーズに対応して、複数の公共交通やそれ以外の移動サービスを最適に組み合わせて検索・予約・決済等を一括で行うサービス。

▼モビリティハブイメージ(フランス・ボルドー)

▼自転車通行空間イメージ(高槻市)

▼既存のシェアサイクルサービス

▼大橋の歩行者専用化イメージ（金沢市）

▼シェアドスペースイメージ(フランス・パリ)

▼自動運転バスイメージ(岐阜市)

人吉市の景観魅力とは

◆球磨川水景

水害直後のアンケートでも多くの市民に愛される球磨川の風景。早朝から夕刻まで多様な表情をもたらすこの大景観こそ最も重要な景観魅力と考えます。
また、人吉城跡、中川原、三橋はその大風景の骨格を作っています。船の行き交う様子、鮎釣り人など川を使いこなす様子もまた風景です。

◆神社仏閣

国宝青井阿蘇神社をはじめ、老神神社、岩屋熊野座神社、永国寺、相良神社など往時のたたずまいをそのままとする歴史的な建築が点在します。それらはまちの回遊性に貢献するランドマークです。

◆人吉城跡

球磨川に浮かぶ城跡石垣は他に類の無い絶景です。
日本の百名城に選ばれる人吉城跡と麓エリアは今後も景観価値を高めていくべきエリアです。

◆まちなか

熊本県を代表する歓楽街である紺屋町通りを中心とするまちなかは、水害で多くを失いましたが新たな事業者や個性的な界隈性の創出によって、まちなからしい風景の再生がのぞまれます。また、鍛冶屋町を中心とする歴史風情を感じさせるエリアらしさも重要です。

**これらを活かし磨き上げる
夜間景観の創出が望まれます**

現況の分析

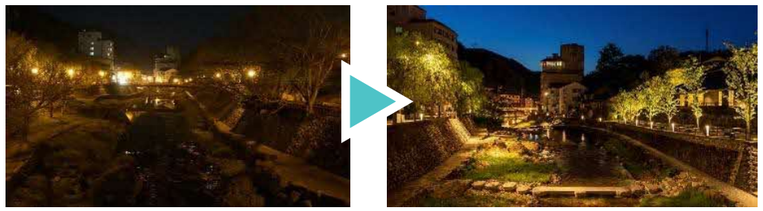
「球磨川水景」は本プロジェクトの核であり、眺める対象としての価値の磨き上げが必須であると位置づけられてきました。

住民ワークショップでの
ヒアリングより

夏目友人帳影絵：©緑川ゆき・白泉社／「夏目友人帳」製作委員会

めざすべき夜間景観とは

◆暗がり → 安全安心な環境へ
◆闇に沈む水辺　→　眺めて楽しい水辺



◆ランドマークを活かす・・・回遊性の獲得
◆エリアの個性を磨く・・・・目的地の創出

現況は市内の各所に暗がりが点在し、球磨川水景も誇れる夜間景観として視認できない。

大橋と中川原公園

人吉城跡石垣

紺屋町交差点部から鍛冶屋町を見る

重要な民間施設である青井阿蘇神社・老神神社・永国寺はライトアップされているが、景観としてのつながりや視点場の整備が不足している。445号・紺屋町通など道路環境の改善が切望されている箇所も散見され、全域として改善とさらなる磨き上げが必要。

過ごして良し、眺めて良し、絵になる夜景が点在する、人吉の新たな夜時間の創出

「球磨川夜景」形成の骨子

ビジョン
住む人・営む人・観光客のすべてに
- **安全安心で**
- **まちの魅力が輝き**
- **めぐる楽しさがある**

夜間景観をめざす

魅力の創出・発見
- ◆一度は見たい夜景（来街動機）
- ◆忘れられない夜景（リピート）
- ◆人に伝えたい夜景（情報拡散）

誘客
人吉城跡・中川原と
球磨川水辺の絶景夜景づくり
文化資源の照明演出

回遊性向上
- ◆環境に配慮したあかり
- ◆省エネ

◆愛着と誇りを感じる地域資源の磨き上げ
- ◆ウォーカブルシティ/かわまち
- ◆歴史文化を灯すあかり
- ◆営みを伝えるあかり

愛着
遊歩空間の照明整備
夜も心地よい居場所

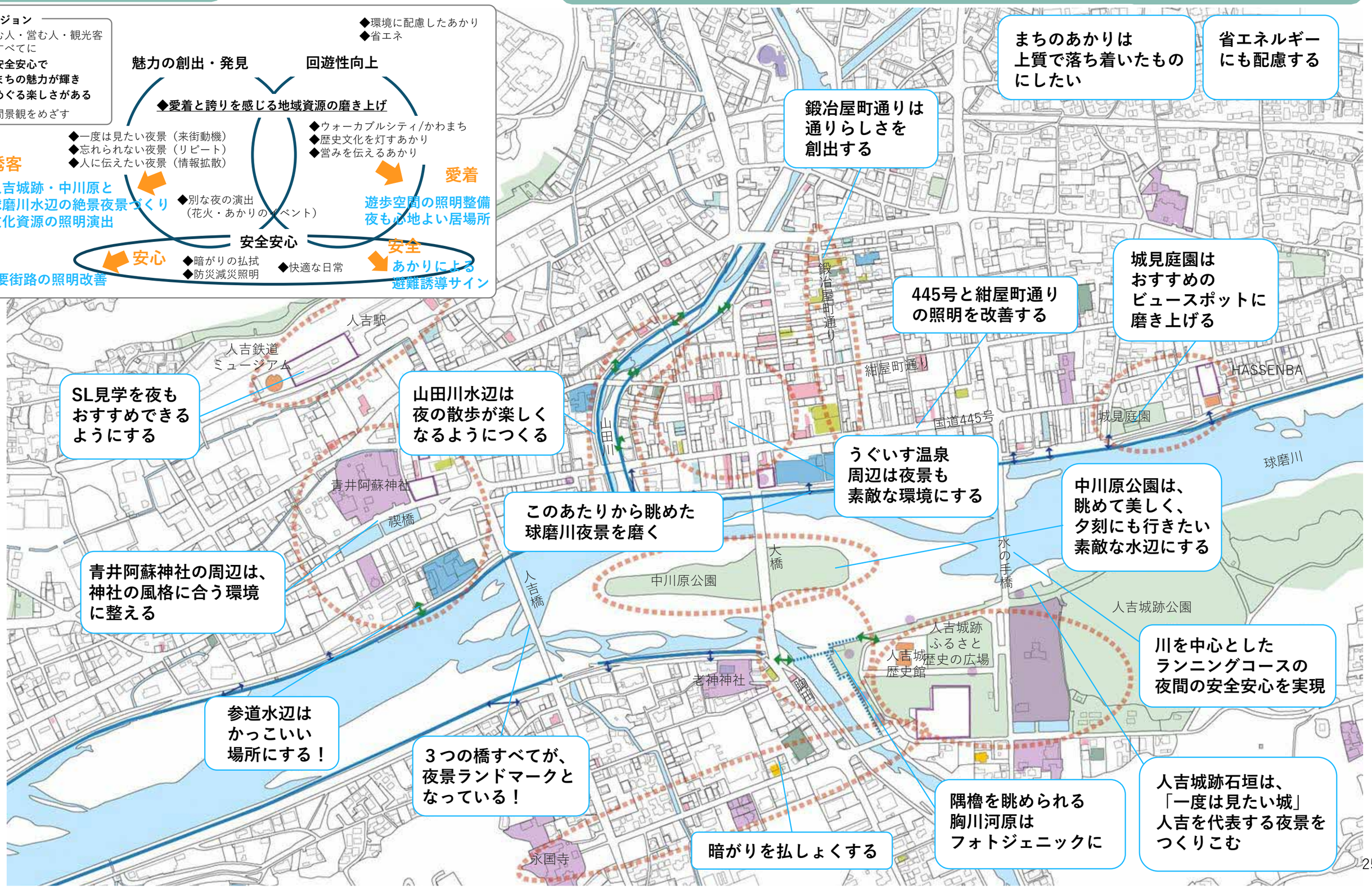
- ◆別な夜の演出
（花火・あかりのイベント）

安全安心

安心
主要街路の照明改善
- ◆暗がりの払拭
- ◆防災減災照明
- ◆快適な日常

安全
あかりによる
避難誘導サイン

重点各エリアの照明整備の方向性



青井阿蘇神社周辺
①国宝青井阿蘇神社の品格と歴史的価値を感じさせる神社周辺を含む夜間景観形成
②河川からの参道の視覚化と、エリアの安全安心の確保
③河川域の魅力的な夜間景観形成

人吉駅＋SL人吉
①SL人吉号を魅力的なランドマークとして演出する
②SL設置に伴う駅前広場の魅力化と安全安心の確保

©緑川ゆき・白泉社／「夏目友人帳」製作委員会

山田川・区画整理(紺屋町)
①散歩が楽しくなる道路空間の創出（建物からの漏れ光も含む）
②河川内遊歩道の夜間の安全安心の確保
③飛び石や橋は、眺めても渡っても心地よい
④紺屋町道路空間の夜間景観改善

鍛冶屋町通り周辺
①風情のある街路空間の維持と更新
②明るさ感の補強と影絵ストリート

うぐいす温泉周辺
①拠点の魅力がにじみ出し、エリアの魅力が高まっているような夜間景観形成。
②拠点に至る主要動線や周辺空地等が夜間にも安全安心であること。
③紺屋町道路空間の夜間景観改善

各橋梁
①手すり照明や橋脚ライトアップなどを行い夜景ランドマークとして活かす
大橋（最重点）：道路照明変更・手すり照明
　　橋脚ライトアップ
手すり照明：出町橋、二条橋、三条橋、大手橋
橋脚ライトアップ：人吉橋

城見庭園・HASSENBA
①城見庭園・HASSENBAは主要な夜間景観エリア・眺望視点場となる
②暗がりを払しょくし、情緒的な陰影のあるエリアとして整える

重点道路
①国道445号
②紺屋町通り

中川原公園・胸川
①球磨川右岸からの最重要夜景エリアであるため「眺めて楽しむ」エリア価値を創出する。（石積み護岸の対岸からの照射も検討）
②橋梁・城跡石垣・中川原公園は重要な夜景ランドマーク
③中川原公園は夕刻から夜間にも静かな利活用が可能な明るさ感を確保する（橋上からのポールスポットライトによる投光等）

土手馬場（新町）
①青井阿蘇神社から人吉城跡をつなぐ主要な回遊ルートとして暗がりを払しょくし、夜間の安全・安心の確保

人吉城跡・歴史館
①「川に浮かぶ城」としての石垣の通年ライトアップの実施
②二の丸三の丸石垣のライトアップ及び、石垣を見えるようにするための樹木の伐採
③「眺める夜景の城」としての具体的なライトアップ実施※各地の城は夜間は眺める対象

「人口減少への対応」と「エリア魅力向上」を両立する仕組みづくり

人口減少や空き地の増加は以前より進んでおり、令和2年の水害によりそれらの課題が加速したと言えます。今後さらに人口減少が進み、水害により更地となった空き地や駐車場の土地利用が全て従前にように戻らないという前提にたつと、今回の復興まちづくりにおいては「人口減少への対応」と「エリア魅力向上」を両立する仕組みづくりが必要となります。

その仕組みとして、未利用地の所有(ストック)→利用(フロー)への転換、点在する未利用地暫定活用をセットで実践することが重要と考えられます。

＜現状課題＞

・未利用地の放置／今後も活用されない可能性

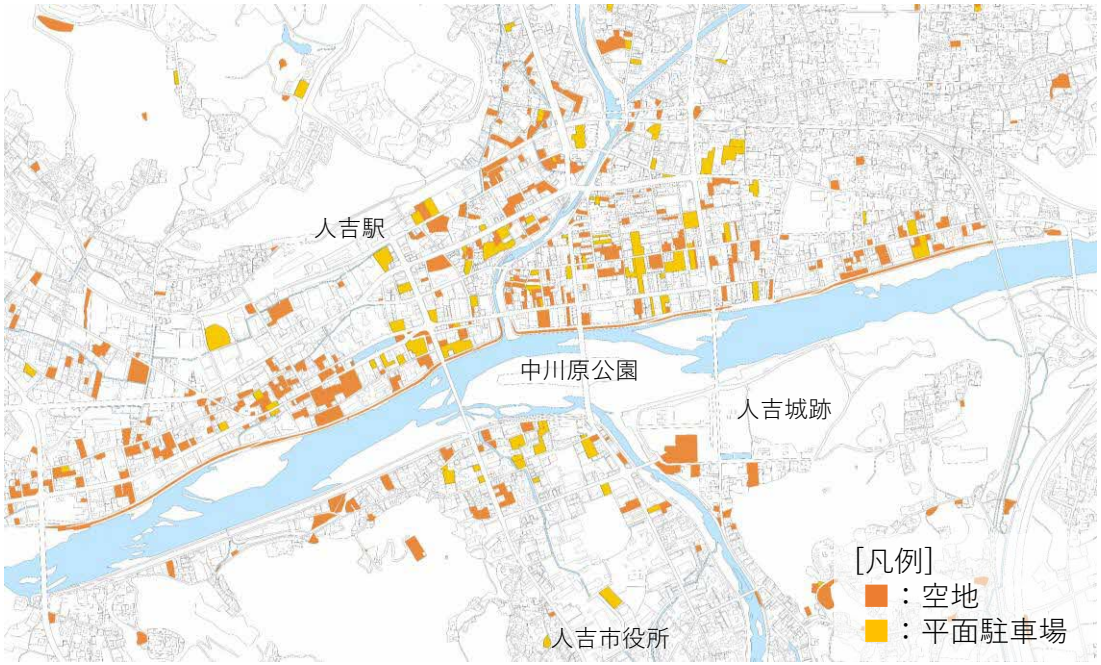
→周辺の住宅・商業・観光などの環境に悪影響

・過去の災害復興の教訓を活かす

→原形復旧でなく将来需要適応型へ

生業・経済復興が大切

「つくる」先行でなく「つかう」視点で公民で投資



まちなかに点在する空き地（R5年時点）

＜目指す将来像＞

・所有(ストック)→利用(フロー)への転換　　**・点在する未利用地の活用、駐車場や緑地の集約化、隣接地一体活用など**

未利用地の「ストック→フロー化」

未利用地の流動化

官民による推進の枠組み

エリア魅力創出に活用する仕組み

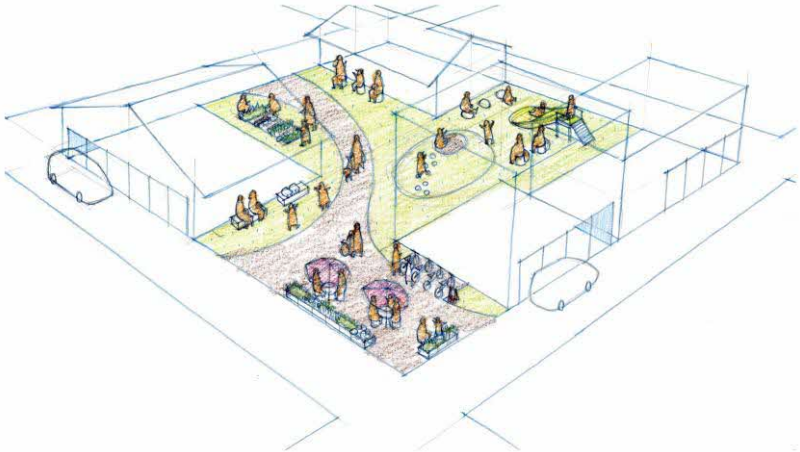
暫定活用

（滞留空間・暫定店舗・農地・グリーンインフラ等）

「人口減少への対応」と「エリア魅力向上」を両立する
未利用地を「ストック→フロー化」、エリア魅力に活用する仕組み

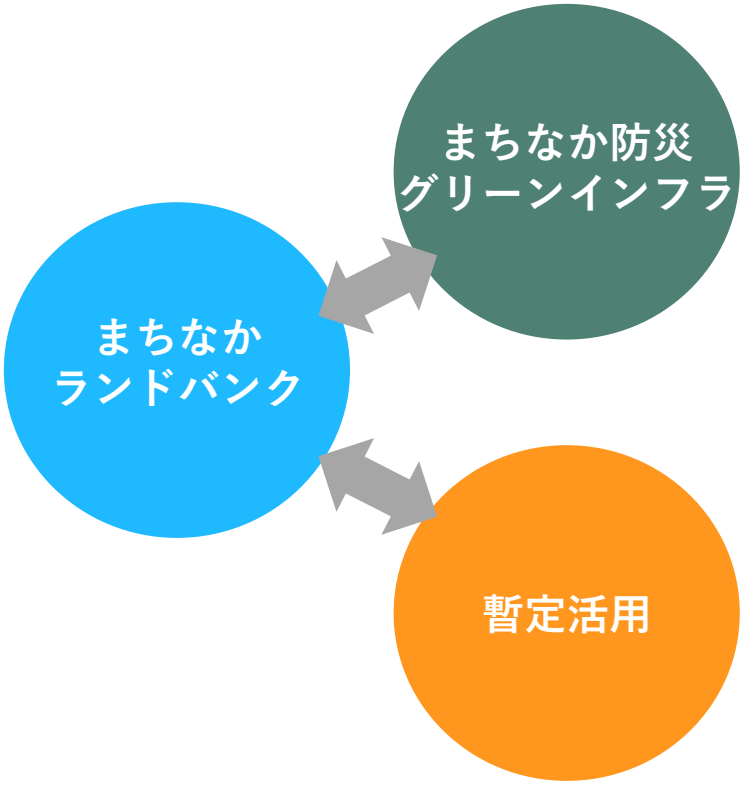
人吉では、水害後、人口減少の流れもあり以前のようにすべての土地で再建が行われず、空き地として残っている場所が多くみられます。水害前のような密な状況を求めるのではなく、**空き地がある疎な状況であっても、周辺環境を悪化させない、豊かな使われ方に変えていく工夫**が求められます。

そこで、土地所有者と行政、民間の運営団体が連携して、空き地に雑草が生い茂り放置された状況ではなく、**暫定的に子どもの遊び場、グリーンを配した駐車場、期間限定店舗などの市民活用**につなげていきます。



空き地の維持管理・活用の仕組み
（土地利用需要が増えない前提で
エリア価値を維持する）

- 空き地オーナーの意向確認
- 重要な場所を優先的に取り組み
- 借上げ公園のような固定資産税減免等のインセンティブ
- 必要に応じて活用希望者マッチング、提案機能



防災・緑の流域治水に寄与
（空き地の一部をグリーンインフラとして維持管理）

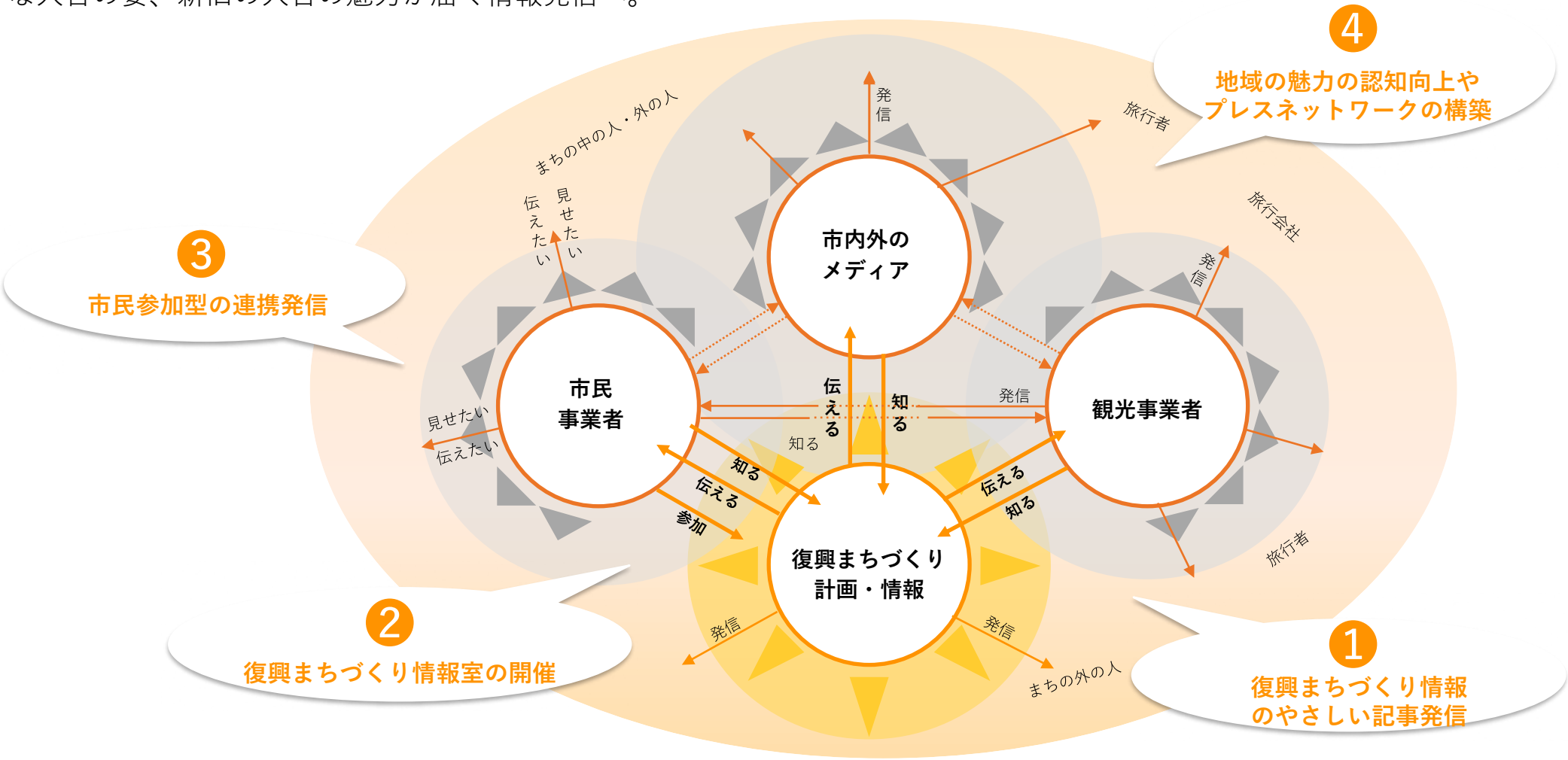
①敷地→雨庭（雨水浸透）
②道路・公園の公共施設の雨水浸透
③防災　緩衝帯・避難路の確保
④カーボンクレジットによる循環

暫定活用
（店舗・滞留空間・農地等）

- 活用希望者マッチング

復興まちづくり情報を共感と愛着につないで
情報の拡大と拡散を生む「まちの発信力を向上するアクション」

復興まちづくりの情報を、メディア、事業者、市民へ共有することで情報の循環を生み、まちの中の人、外の人へ情報が拡散される連携をつくります。まちの人のまちづくりへの参加の機会、まちを楽しむ機会を増やし、まちの外の人へ復興の進む新たな人吉の姿、新旧の人吉の魅力が届く情報発信へ。



まちの内外に届く「復興まちづくり」の情報発信

行政→民間事業者・市民へ共有

民間事業者・市民へ共有→参加と発信

共感と愛着で「まちの発信力」を向上するアクションの仕組み＆ステップ

４つのアクションをステップとして情報発信の連携と協働の実現を目指す

仕組み＆ステップ 1
復興まちづくり情報のやさしい記事発信

行政広報における「見つけづらさ」「分かりづらさ」の解決に取り組み、広い層が読みやすいやさしい記事発信を行う。

仕組み＆ステップ 2
復興まちづくり情報室の開催

復興まちづくりの情報を共有したい行政、知りたい事業者や市民、発信したいメディアなどが会し、情報交換と連携発信を生み出す場所にとらわれないサロン的場づくり。

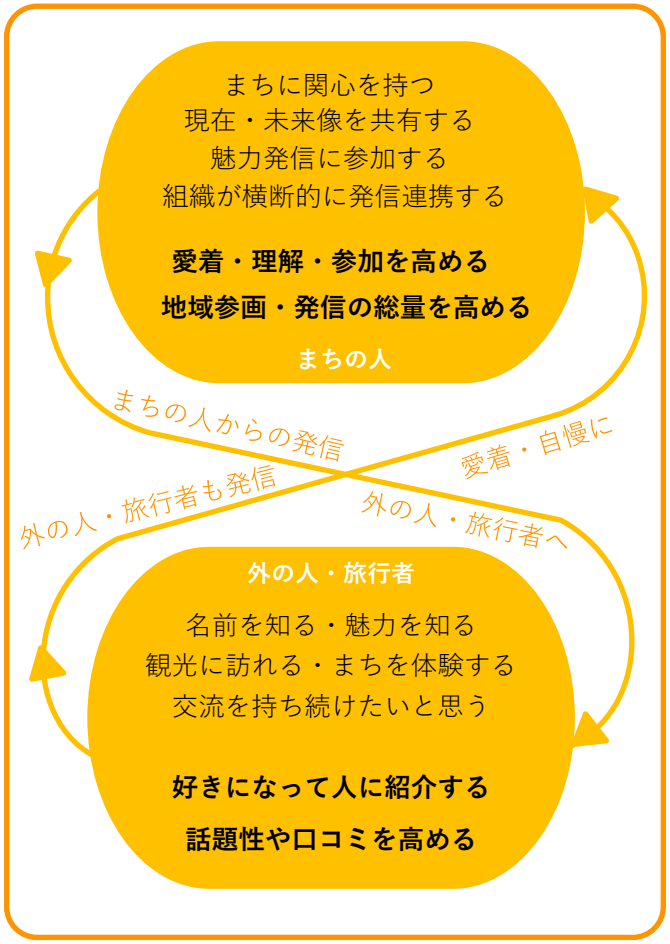
仕組み＆ステップ 3
市民参加型の連携発信

市内で活動するメディアや事業者発信・個人発信のSNSと連携発信を起こすことで、まちの発信総力を高める。多くのメディアやアカウントが活動する人吉市の強みを活かす。
情報共有によって、市内発信プレイヤーと連携する。情報接触機会を増やし、来訪者による発信や双方の循環を促す。

仕組み＆ステップ 4
地域の魅力の認知向上やプレスネットワークの構築

発信循環の中で生まれる地域の魅力を可視化し、イメージの定着を目指した長期広報計画に取り組む。
プレスネットワークの構築と、適切な情報発信の継続から、認知向上に長期的に取り組みます。

まちへの愛着とまちのイメージを高める循環を育てる



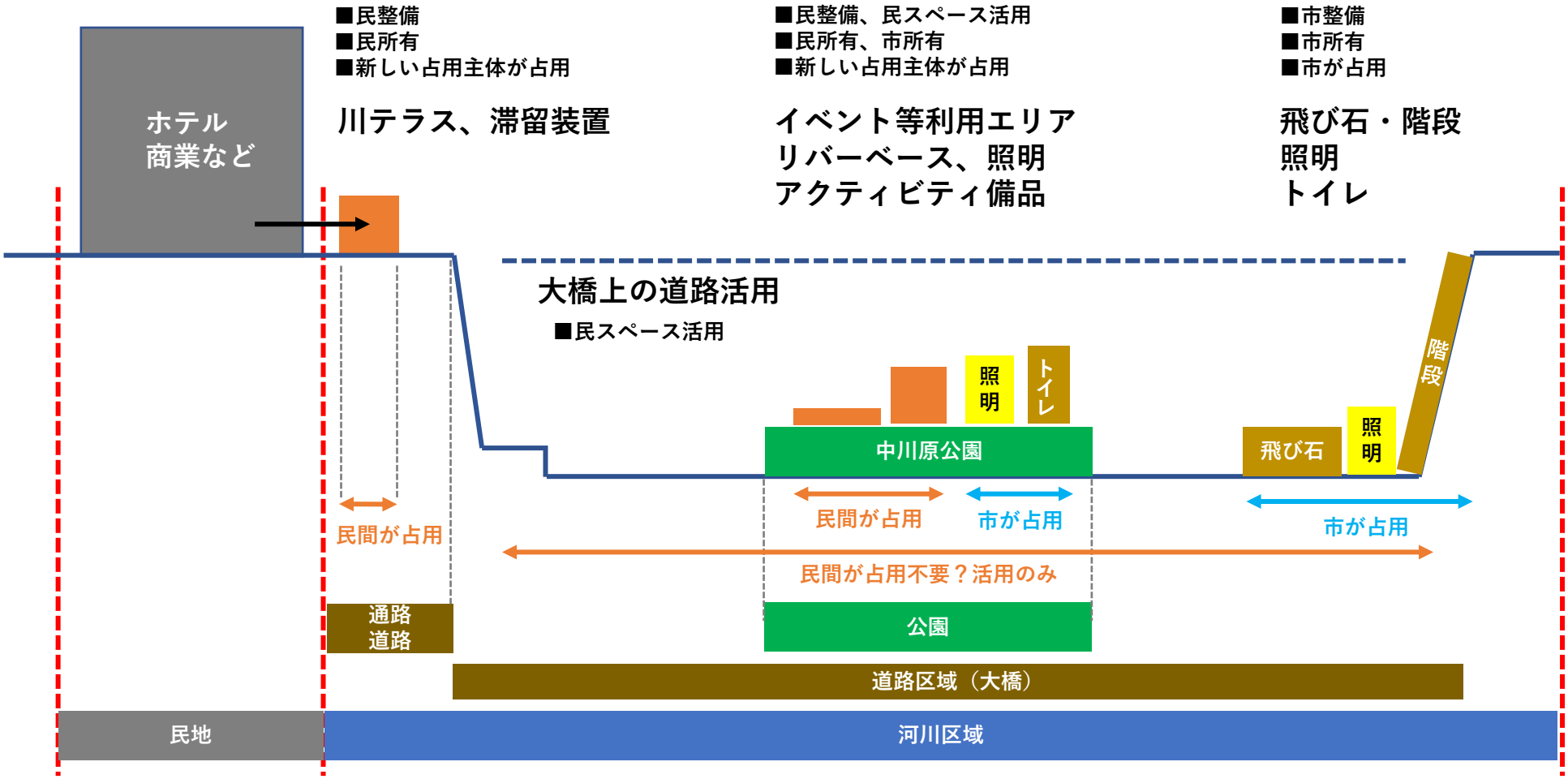
復興まちづくりの情報発信はこちらから！

人吉市復興まちづくりデザイン会議公式

Instagram　X　note

河川区域・公園区域・道路区域の占用スキーム（案）

・河川区域・公園区域・道路区域における、整備主体・所有主体・占用主体は以下のイメージです。
・河川→都市・地域再生等利用区域、公園→指定管理または設置許可、道路→道路協力団体、などの特例制度を活用し、区域区分を超えて一括してひとつの主体が占用して運営管理できる方法を検討します。



「担い手」と「財源」の確保

持続的な地域経営に向け、地域住民・関係人口、観光客、働き手のそれぞれの共感や満足度を高めるため、以下の３つの要素に取り組みます。主体としては、関係する既存組織の役割や対象エリア、各々の経営資源を確認しつつ、必要に応じて新たな財源や担い手の検討を行います。

地域経営の３つの要素

地域住民 関係人口 の共感・参画 ⟷ **観光戦略づくり**
- 戦略立案、事業推進
- エリアマーケティング
- 対観光客情報発信
- コンテンツ企画

観光客 の満足 ⟷ **不動産・公共空間運営**
- 不動産事業（空物件活用）
- 公共空間運営（河川道路公園）
- 事業者誘致
- 駐車場運営

働き手 の満足 ⟷ **事業環境づくり**
- 地域事業者支援
- 働く魅力づくり
- 地域循環の促進

景観・歴史・文化を維持発展する景観ガイドライン検討

地域の誇る「球磨川の景観」「まちの歴史と文化」を維持し発展させていくために、既存の景観計画やガイドライン等との整合を図りつつ、以下のガイドライン策定を検討します。

景観ガイドライン			夜間景観ガイドライン
①川への視線の抜け	②川への視点場	③街並み	公共照明の設置に関するルール
対象： 川に面した建物 エリア指定	対象： 川・城・中川原などを見渡せるポイント周辺	対象： 主要回遊動線沿い建物 エリア指定	対象： 道路照明 広場公園照明
民間	公共・民間	民間	公共
例） ・川沿いに面した建物の1階を川への視線が抜けるように工夫 ・眺望景観のルール	例） ・眺望を確保、引き立てる設え ・佇めるような設え	例） ・建物形状/素材/ファサード ・照明/看板/色彩/緑などの統一	例） ・道路照明のルール ・広場/公園照明の考え方

まちなかの価値を伝えるサイン計画・整備

まちなかの情報を適切に伝え案内するための統一感あるサインについて、以下のプロセスで計画、整備を行います。

①まちなかの既存サインの現状／課題の把握

②課題等への対応、まちなかのサインに関する基本方針作成

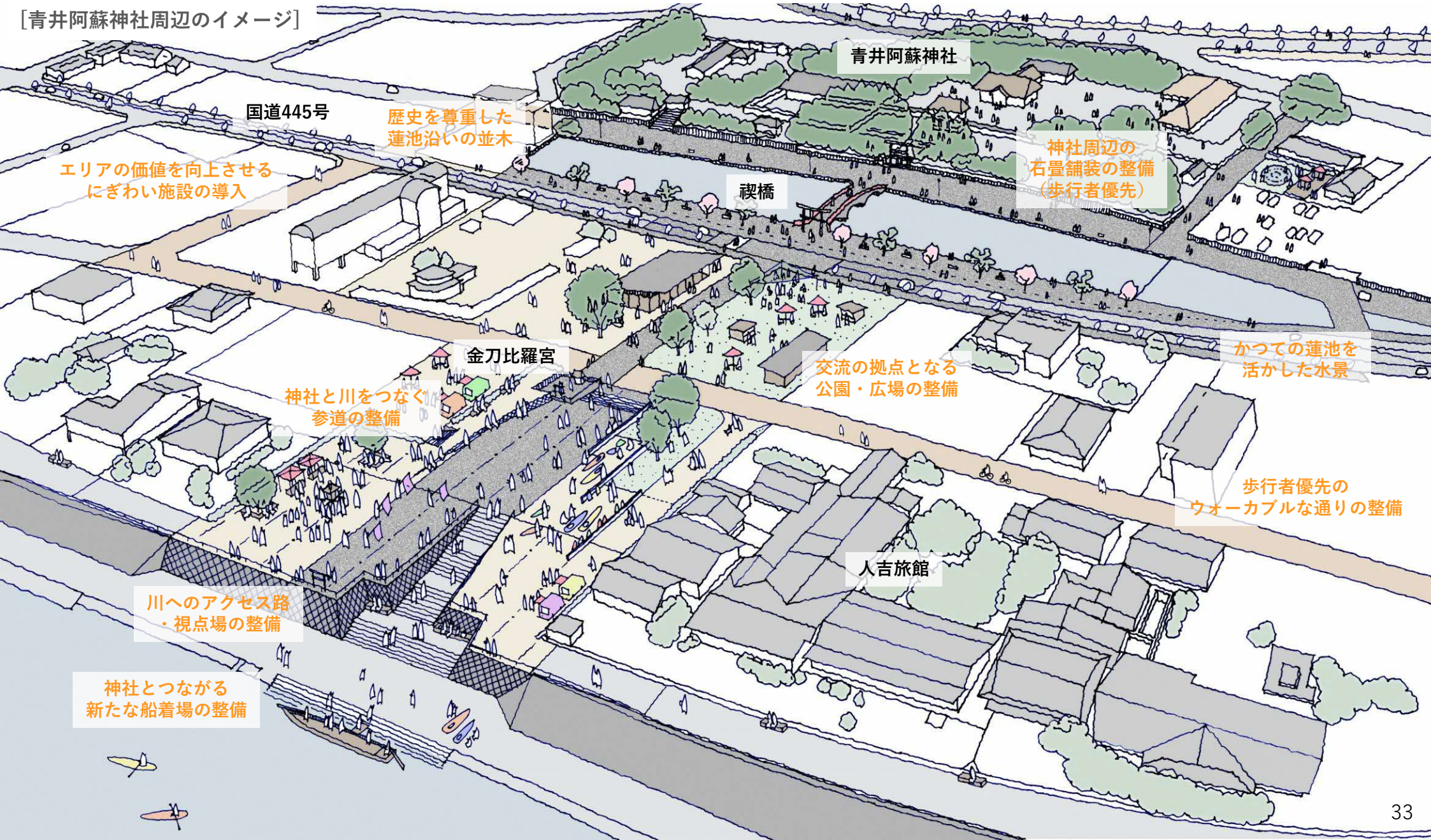
③基本方針に基づき、配置計画、表示計画、意匠計画作成

（２）拠点エリア　①青井阿蘇神社＋球磨川

・人吉球磨に残る数々の歴史的建造物の代表であり、人吉球磨地域住民の心の拠り所である**青井阿蘇神社と連携し、人吉球磨に点在する歴史的建造物や相良三十三観音、日本遺産をつなぐ拠点としての機能を強化**します。

・青井阿蘇神社周辺では、**歴史性を活かした石畳を参道から球磨川まで連続させ、神社の森と球磨川の水をつなぎます。**

[青井阿蘇神社周辺のイメージ]



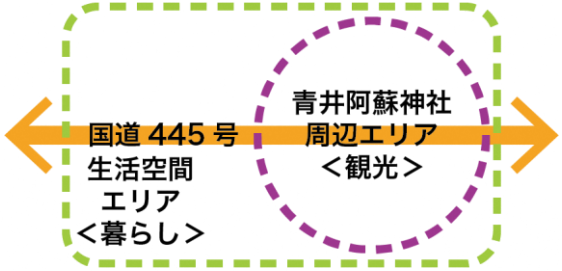
あかりのキーワード

厳かさに満ちた上質なあかりの重層

[青井阿蘇神社周辺の夜間景観イメージ]

（２）拠点エリア　①青井阿蘇神社＋球磨川

○青井阿蘇神社周辺の考え方



・エリア内の道路は**歩行者を優先とした回遊動線として高質化整備**を行い、新たにできる広場や公園では公民連携事業による**市民・来訪者の交流の拠点**をつくります。

・青井阿蘇神社周辺は観光の拠点、その周辺エリアは地元の生活空間としての性格を持ちますが、**国道445号では通りの一貫性を持った基盤整備**を行います。

○まちづくりの3つの理念

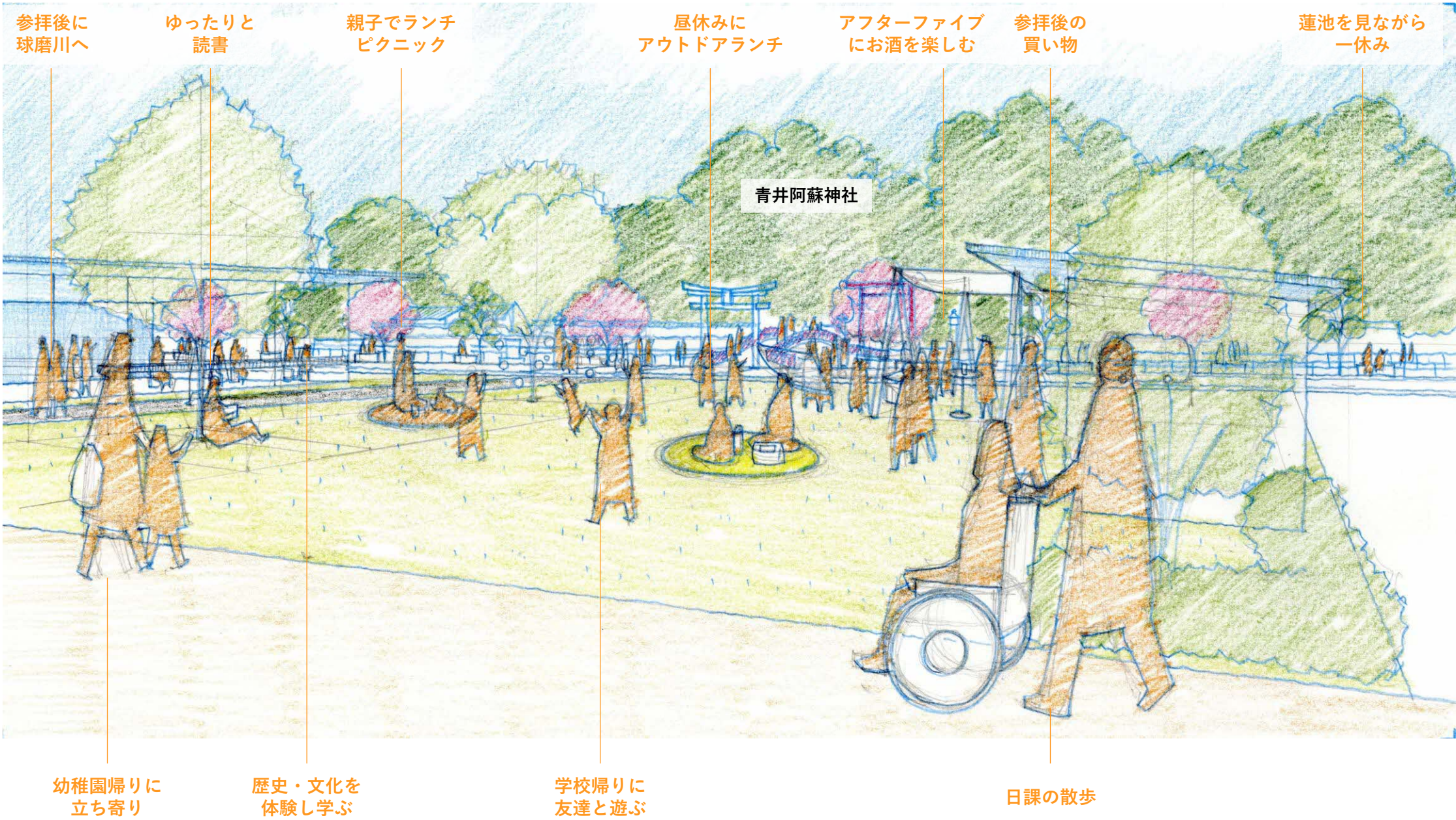
①地元住民が愛し誇りを持つ“**歴史・文化を際立たせる**”まちづくり

②来訪者が歴史や暮らしの蓄積を感じ“**よりまちを知りたくなる**”まちづくり

③住民・来訪者が“**共存し接点が生まれる**”まちづくり

○青井地区全体の道路・公園整備の考え方

［公園・広場シーンイメージ］



◯地元市民・事業者の声

◯青井阿蘇神社・歴史・文化

・保守と進取。守るだけではなく新しい風を吹き込んできた。古いというのは誰かが丁寧にしていかないと古さを醸し出せない。歴史はあるけれども斬新さがあることが大事である。
・人吉旅館は文化財として後世まで守っていきたい。
・高い建物はなるべく控え古い街並みをつくりたい。
・青井阿蘇神社は人吉の宝で「青井の杜」ができれば良い。
・地区の歴史文化を踏まえ神様前の門前町のイメージとして統一してはどうか。
・ゆっくりと歩きながら風情を楽しめる参道。
・球磨川まで含めた参拝コースを作る。
・おかげ横丁のイメージ。
・大宰府のように飲食やお土産等があると良い。
・昔の参勤交代時、神社から参道を通り球磨川から舟で出ていた。
・元々鳥居があったため、堤防を作るときに、今の鳥居になった。参勤交代で来てお祓いして、参拝に来ていた。お祭りのときも禊をしていた。
・金刀比羅宮の参道は曲がっているが、中央は神様の道でありそれを避けるため曲がっている。
・金刀比羅宮の所は昔のように御旅所にしてはどうか。
・昭和38年に金刀比羅宮を移してきた。石垣は最低限残さないといけない。

◯暮らしと賑わいの共存

・青井阿蘇神社を中心とした賑わいの部分と昔からの住民が静かに暮らしてきた質の高い住宅地が共存し、補い合うのが理想。
・普段もそれなりに風情がある状態が良い。
・地区の安全性を確保した上で、併せて賑わいにつなげるなら良い。
・ファミリー世帯が住みたいと思うまちづくりにしてほしい。
・若い人が神社周辺にお店を出すようになるとよい。

◯回遊性向上

・人吉駅からの回遊性を図る。
・夜の街や球磨川沿いを明るくし回遊性を図る。
・青井阿蘇神社の前を石畳にして車で速く走れないようにして、人がゆったり歩けるようにする。

◯憩いの空間

・高齢者が腰をかけて会話ができる憩いの空間があると良い。
・若者向けの落ち着いてお茶や話ができるところがあると良い。
・参拝や観光に来た方が立ち寄れる場所。

◯球磨川を活かす

・水辺を活かした空間づくり。
・川の近くに子供が遊べる公園があれば良い。
・宿泊客が夕食後、浴衣と下駄を履き川沿いを散策できると良い。
・ゆっくりとくつろげ、眺めがよく、せせらぎの音を聞きながら夕涼みができるような長時間滞留できるような空間があると良い。

◯観光・活用

・楼門前に広いスペースがあれば見物客が集まり参拝者も通りやすくなる。
・トラック朝市などのイベントができるようなスペースがあれば良い。
・青井地区は観光が第一で以前以上の観光地をつくるべき。
・国道445号が広くなり週末戸板市のような催しができると良い。
・青井阿蘇神社という国宝を活かした経済効果に繋がることが大事。
・青井阿蘇神社は国宝だが身近に感じるものになってほしい。
・新しい賑わい拠点にバスを旋回させて、国指定文化財巡りのツアーを組むとよいか。毎週土日だけやる。
・青井阿蘇神社、老神神社、永国寺をセットで回れるとよい。
・人吉のインバウンドは、青井阿蘇神社に信仰目的で来てもらえるとよい。来てもらったついでに、神社の前に施設があれば滞留時間が増える。そうなれば泊りがけで来る。
・青井阿蘇神社を核にして、そこから観光の道を作っていった方がよいのではないか。観光を残していくべきではないか。
・球磨川くだりのをメインのスタート地点をHASSENBAにして、途中青井阿蘇神社からも乗れる、料金は同じ、というモデルを作ると良いだろう。ただし、増水時は着岸できないという運用にすればよい。
・球磨川くだりでHASSENBAでスタートして青井で下りて参拝して再度乗船するプログラムは時間がかかりすぎてツアーには向かない。

◯駐車場

・駐車場は全然足りない。神社周辺に車置いて、巡れるようなものがあればいい。まとまった駐車場は置いたほうがよい。100台くらいは必要。

○参考イメージ

・かつて青井阿蘇神社付近の球磨川水際に鳥居があった

出典：熊本県文化財調査報告　熊本県歴史の道調査　人吉街道

・青井阿蘇神社前の蓮池はかつて山田川付近までが範囲であった

［明治6年頃の地図］　　出典：桑原公徳編「歴史景観の復原」

（２）拠点エリア　②中川原公園＋大橋

・**中川原公園を回遊のハブ、日常の憩いの場**とするため、照明や滞留空間、樹木等を設置し、**球磨川を代表する水辺空間**を演出します。

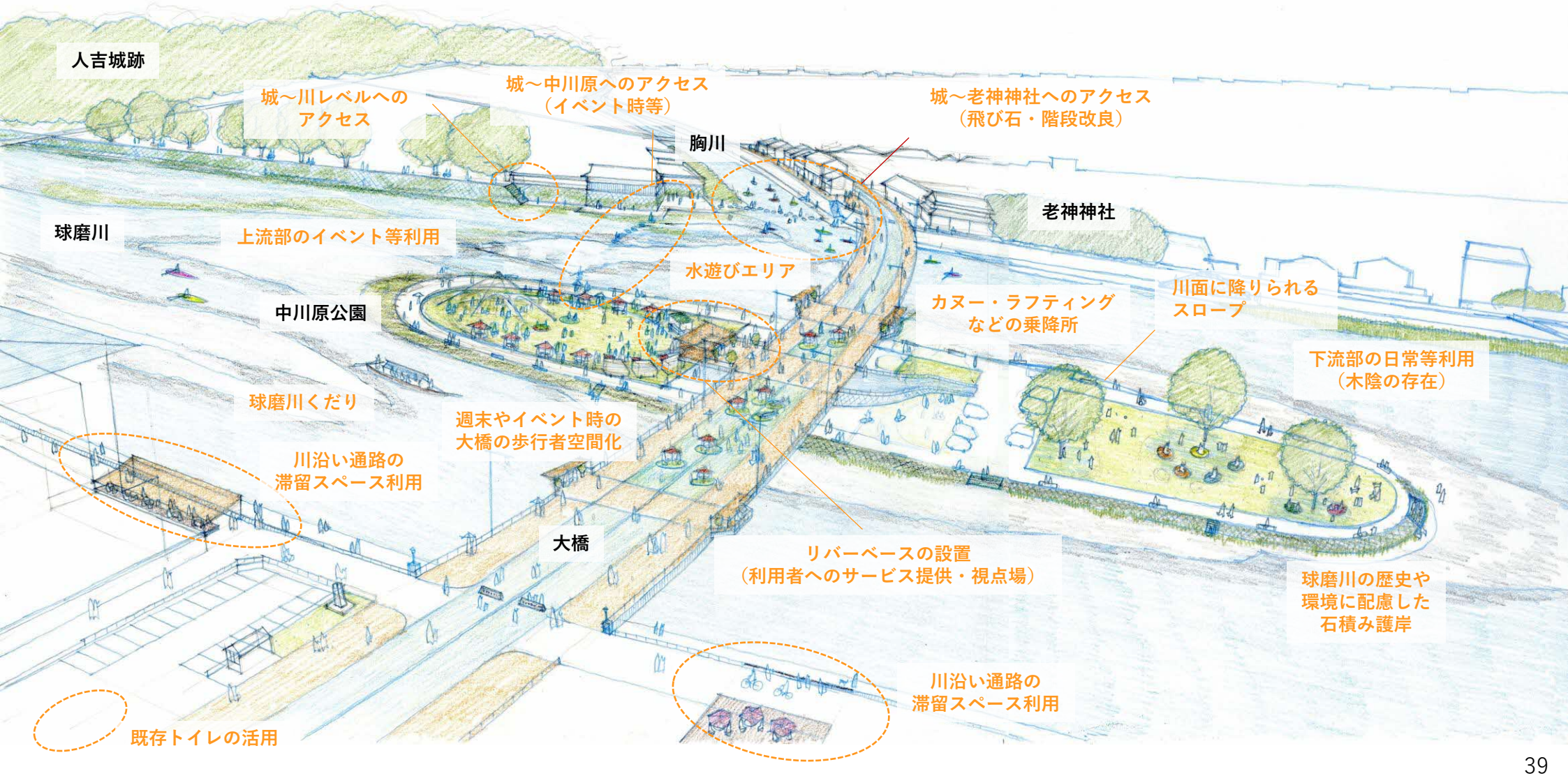
・日常利用を促進するため、公園利用者へ飲食やアクティビティ用具のレンタル、各種情報提供などの**サービス提供を行うリバーベース**を設けます。

・**階段や飛び石を設けることで城跡や胸川とつながり、より川に近づきやすい環境**をつくります。

・**大橋を週末・イベント時に歩行者専用化**することで、中川原公園との一体的な活用、周辺との回遊強化を図ります。

・球磨川右岸沿いの河川通路を沿道建物と連動して心地よい滞留空間に変え、**川や城跡を対岸から見る・見られるの関係**をつくります。

[中川原公園・大橋のイメージ]



あかりのキーワード

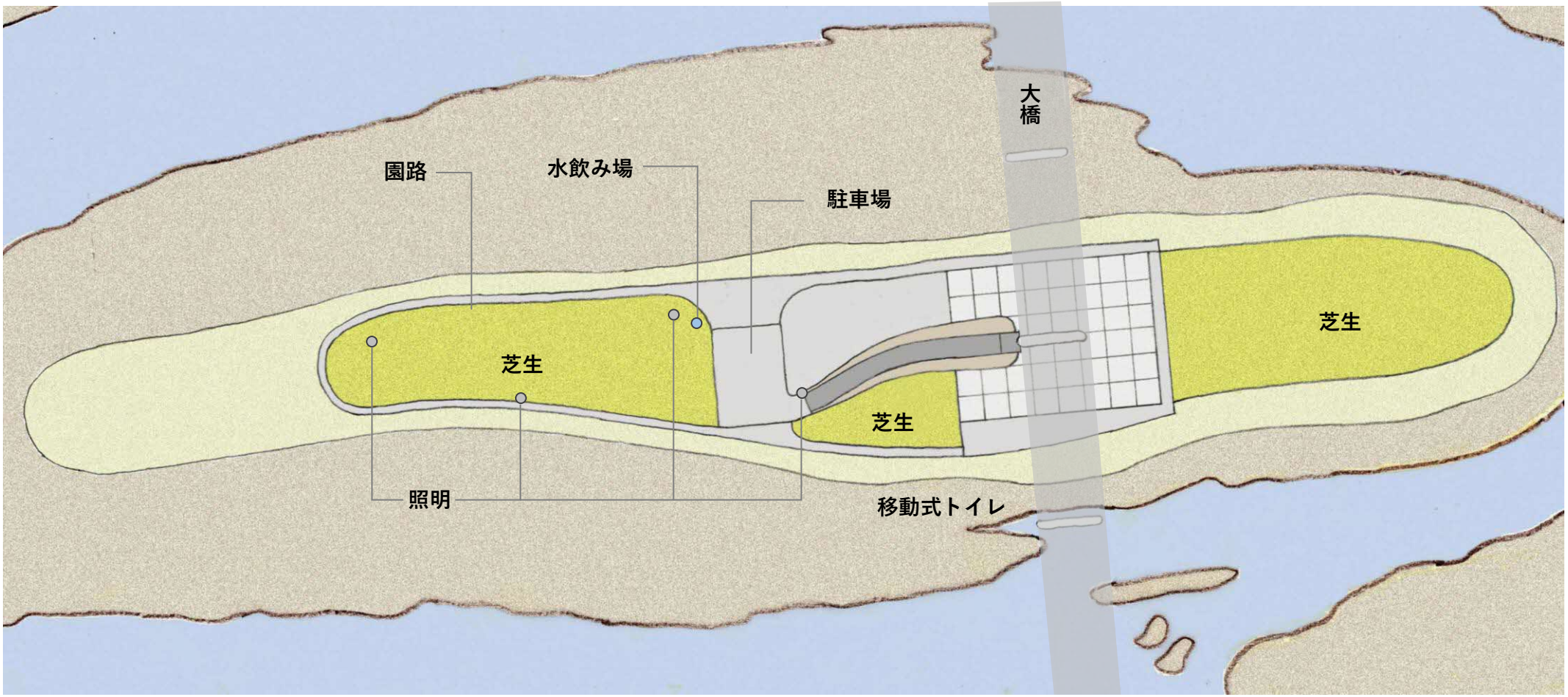
球磨川水辺を魅せるあかり

［中川原公園・大橋の夜間景観イメージ］

今後社会実験を重ね、将来像をつくり、追加整備＆運営体制づくりを行う

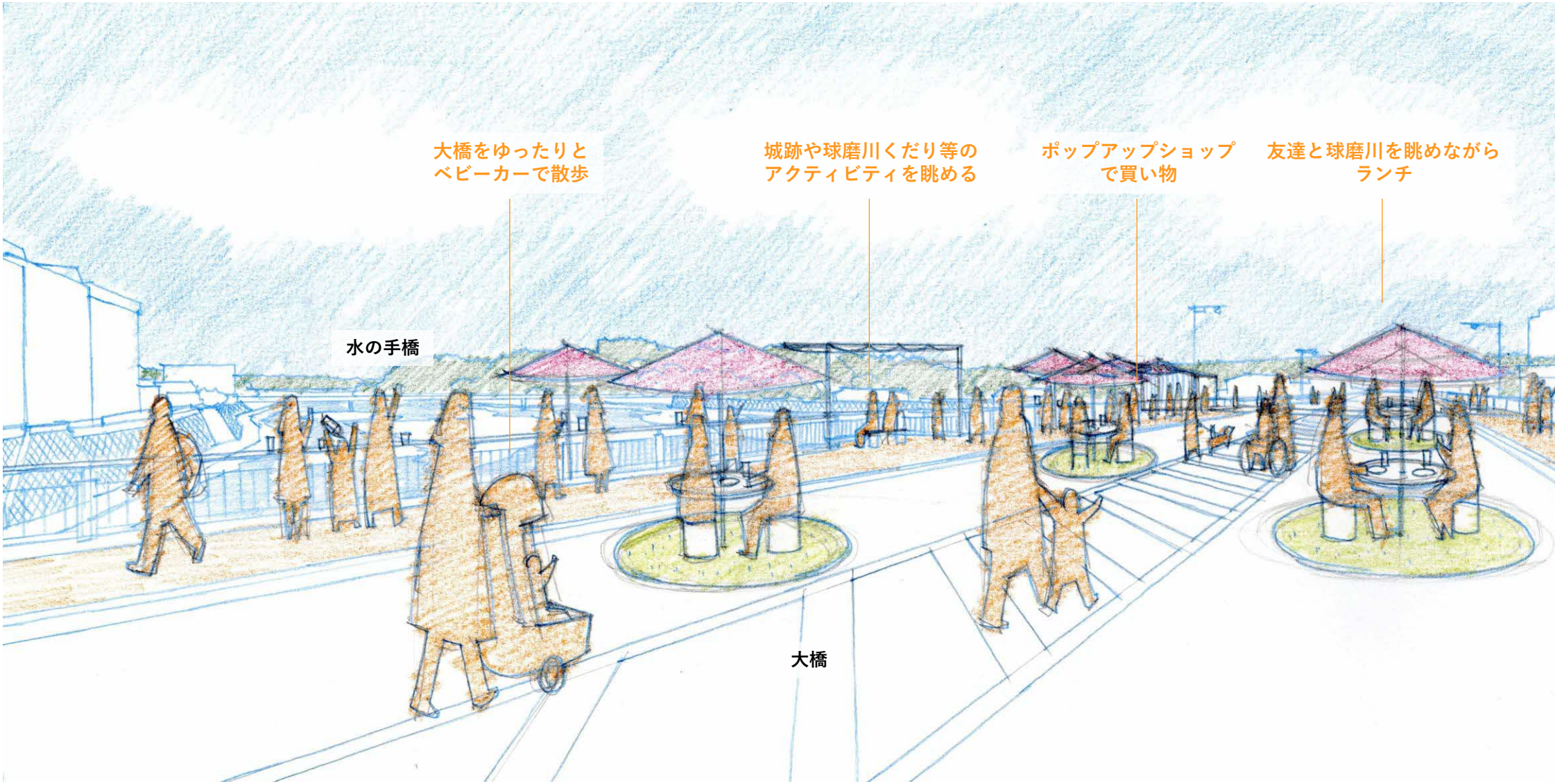
中川原公園では、令和5-6年度にかけて災害復旧工事が行われており、下図のような整備が予定されています。復旧工事のため必要最低限の舗装や園路、照明等の整備となっていますが、今後さまざまな活用や滞留空間設置等の社会実験を重ね、より良い空間整備とその運営体制づくりを行っていきます。

［令和5-6年度復旧工事による整備イメージ］



大橋の歩行者専用化（イベント時、週末等）

［大橋（歩行者天国時）シーンイメージ］



中川原公園は以前から回遊のハブであり、人吉の象徴的な場所だった。これからも大切な場所。

・昔から城とまちをつないでいた場所、中川原には２つの橋がかかり人がまち～中川原～城を往来していた。
・市民の日常時の利用の場、特別なイベントの場、最も身近な人吉を象徴する場。運動会、祭の御旅所、サーカス、花火大会など様々な使われ方。
・以前、田村剛博士「人吉公園計画」において、人吉の観光のメイン、地域のみでなく観光客のための公園としてあるべきと言われた場所。
・現代も、まち～中川原～城の往来ができ、回遊のハブとなり、最高の眺望の場を活かし、歩行者天国やリバーベースなどの装置で３つの場所をつなぐ。
・中川原では多様な使われ方や過ごし方を受け入れる、地域はもちろん観光客も楽しめる場に。

大橋の中間地点の場所は、現代におけるまちと城をつなぐ「全方向の眺望点」＆「散策の拠点」

・大橋や中川原から、川の向こう４方向に、石垣がみえる人吉城、温泉旅館や商店、青井阿蘇神社、老神神社が目に入る、期待感高まる散策の拠点。

［これまでの中川原公園の使われ方］

花火大会

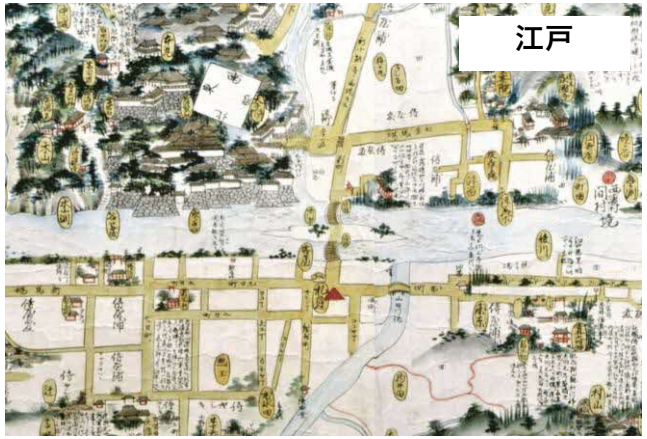
鮎の築場

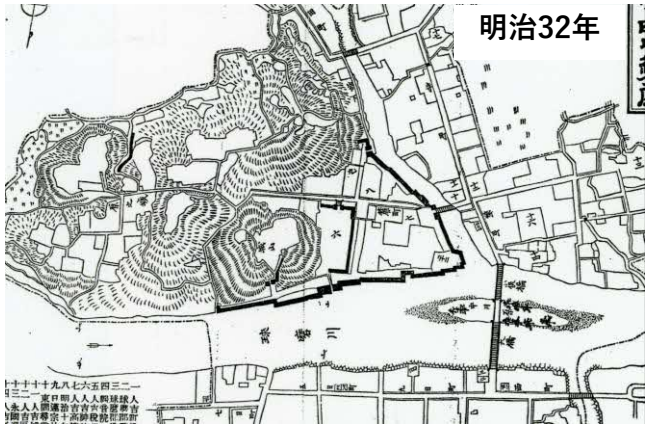
球磨川くだり

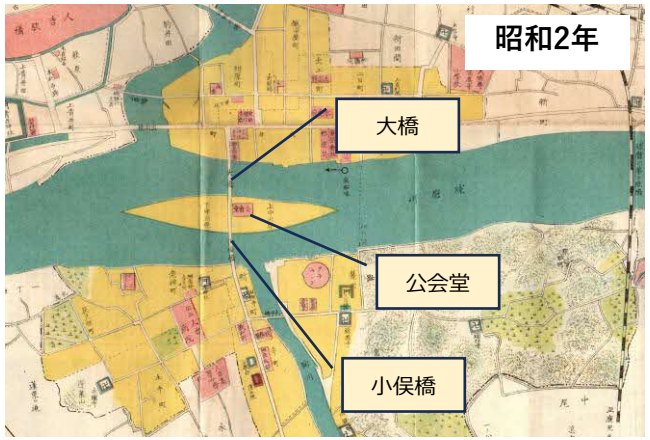
遊具

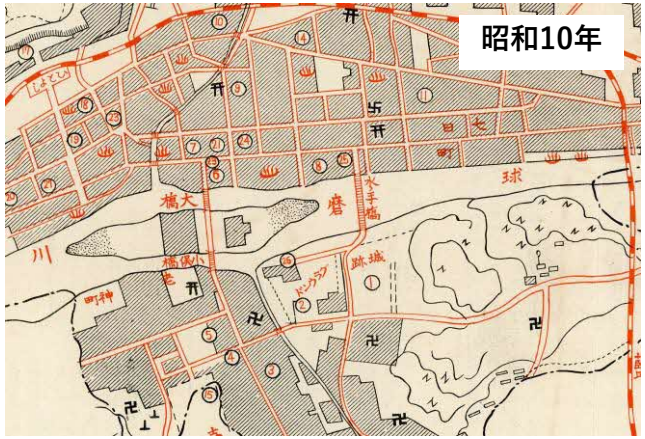
キャンプ場

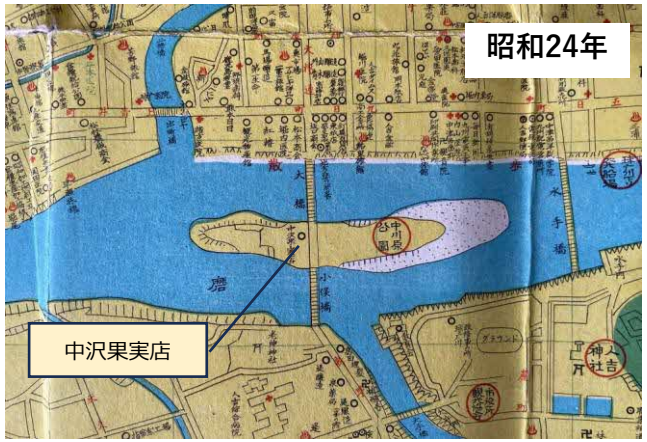
中川原公園の以前の地図

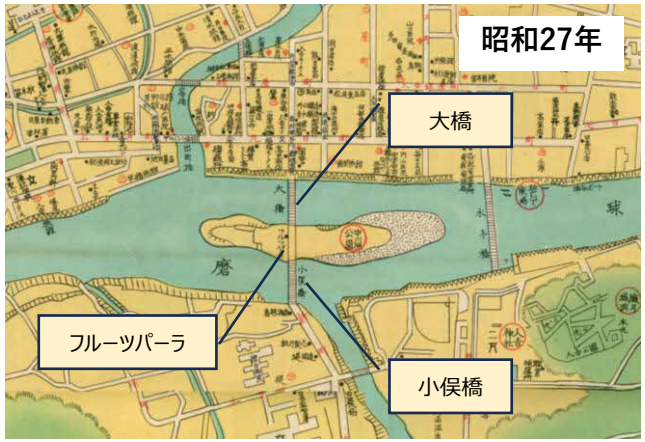












田村剛博士の「人吉公園計画」
（人吉文化　第34号）昭和38年

人吉町は日本三急流、日本二十五勝をもって天下の絶勝として自他ともに許す球磨郡の首都に当り山河襟帯風光真に明眉にして、天下稀有の美都として夙に定評がある。

市内を貫き矢を射るが如くに流るる球磨川とこれに臨み松柏の色を誇る旧相良侯が名城の跡たる城山と、その水面に浮ぶ中島を骼軀として南北の二大橋を両翼に擬すれば婉然大鳥の飛翔するが如き姿の鳳凰橋一円は実に人吉町観光の焦点というべきである。

天下の名勝地たる人吉町の風光を美化修飾すると共に、公園地そのものを広く遊覧者のために施設するのはその一である。次に本公園は現在においては人吉町唯一の公園であるから町民に対してもあらゆる要求を満足せしめねばならぬ。（遊覧者を本位とすべきか但しは地方民を本位とすべきかをまず決定すべきである）（少なくとも将来天下の観光者のための公園として完成するを目標とするが至当である。）